



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中世後期ドイツにおけるライン宮中伯の領邦支配とヘゲモニー (3)
Author(s)	田口, 正樹
Citation	北大法学論集, 64(5), 23-65
Issue Date	2014-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54533
Type	departmental bulletin paper
File Information	HLR64-5_003.pdf



中世後期ドイツにおける
ライン宮中伯の領邦支配とヘゲモニー
(三)

田口正樹

目次

はじめに

一、中世後期プファルツ政治史

二、王権および帝国国制との関係

(一) 帝国国制上の特殊な地位

(二) 国王領の質入れとプファルツ領邦の形成

三. 君主家門の意義

(一) 相続関係の規制(分割相続と長子相続)

(二) 婚姻関係

(三) 墓所の選択

四. 領邦支配の諸手段

(一) 宮廷

(a) 宮廷役職

(b) 書記局

(c) 顧問

(d) 宮廷裁判所

(e) 中央の財務行政

(f) 宮廷所在地としてのハイデルベルク

(g) 文化的中心としての宮廷

(二) ハイデルベルク大学

(三) アムト制と地方行財政

(四) 教会政策

(五) 軍制

(六) 領邦立法

(七) 収入と租税

五. 領邦諸身分とプファルツ意識

六. 地方の秩序とヘゲモニー

(以上六四卷三号)

(以上六四卷四号)

(以上本号)

おわりに

(f) 宮廷所在地としてのハイデルベルク

中世後期ドイツの諸領邦における宮廷所在地 *Residenz* の形成とその機能は、近年多くの研究がなされているテーマである。⁽¹⁾ プファルトツにおいては、ネッカー河畔のハイデルベルクが、宮中伯の宮廷所在地として発達していった。⁽²⁾

元来ヴォルムス司教から宮中伯に授与された教会レーンであったハイデルベルクは、既に一二世紀末から、ライン宮中伯にとって重要拠点の一つであり、⁽⁴⁾ 一三世紀初めには市民団体の存在も確認されるが、⁽⁵⁾ 一四世紀中頃にも、まだ人口約三〇〇〇の中小都市にすぎなかった。しかし一四世紀後半に宮中伯ループレヒト一世のもとで、ハイデルベルクは宮廷所在地として争われない地位を確立する。

ループレヒト一世の滞在地点を見ると、判明する限りではハイデルベルクでの滞在頻度が他の地点を圧しており、⁽⁶⁾ また証書発行の面でもハイデルベルクは主要な発行場所となった。⁽⁷⁾ ループレヒト一世はクリスマスや復活祭などの重要な教会祝祭をしばしばハイデルベルクで祝ったものと推測され、またハイデルベルクは一三八四年に国王ヴェンツェルが諸侯と都市同盟の対立の調停を試みた、いわゆるハイデルベルク和議 *Heideberger Stilling* の舞台となるなど何度か皇帝・国王の来訪を見、更にループレヒト一世はいくつかのトーナメントをハイデルベルクで催した。⁽⁸⁾ ループレヒト一世は、ハイデルベルク市の発展のための措置をも講じた。一三五七年になされた年市 (メッセ) 設立の試みは持続的な成果をあげなかったが、⁽⁹⁾ 後で詳しく論じる一三八六年のハイデルベルク大学創設は、市の発展にとって重要な刺激となり、かつハイデルベルクの中心地的機能を高めることになった。⁽¹⁰⁾

このような中心地としての発展の一方で、ハイデルベルク市における市民自治の展開は、宮中伯によって制約されていた。市長職と都市参事会員職への就任が宮中伯の同意のもとに行われるべきことは、一三五七年に都市側によって改めて承認された。それにとどまらず、宮中伯は場合によってはこれらの職の任免をみずから行うこともできるものとされた。⁽¹¹⁾

確かに、ループレヒト一世の移動行動があいかわらず活発であることは見逃されるべきではないが、他方でこうした宮廷所在地形成の進展は、中世後期ドイツにおける支配の濃密化を反映し、その動きを更に促進するものであったと言える。ループレヒト一世の治世はこの面で、プファルツ領邦とその影響圏の歴史の中で、大きな意義を有していたと見ることができる。

ハイデルベルクの宮廷所在地としての発展は、ループレヒト一世の死後も大きな断絶なく継続された。一三九二年には、ループレヒト二世が、近傍の豊かな村ベルクハイム Bergheim をハイデルベルクに併合し、これにより市域は旧市の西側へ一気に二倍近く拡大された。⁽¹³⁾更に国王ループレヒトのもとで、前述のように家門の宗教的中心として聖霊参事会教会 Heiligegeiststift もハイデルベルクに設立される。⁽¹⁴⁾一五世紀の間に、ハイデルベルクの城は、時代に合った軍事・統治・居住設備を備えた居城 Schloss へと拡張された。⁽¹⁵⁾一四五七年に宮中伯フリードリヒ一世は書記局用にハイデルベルク市内の建物を購入し、それが一四六二年に消失した後は城の近くに別の建物を建てさせたが、そこには書記局以外に顧問の会議室と宮廷裁判所用の会議室も所在していた。⁽¹⁶⁾都市の人口自体は一五世紀中頃にもまだ五〇〇〇人程度と推定されるとはいえ、⁽¹⁷⁾ハイデルベルクはこのようにして、近世的な居城と官庁を備えた領邦首都へと発展していったのである。

宮廷所在地の形成の反面として、ハイデルベルクの宮廷に集まる多数の人員をいかに養うかは、一つの大きな問題と

なった。⁽¹⁸⁾ 宮廷に必要な物資は、ハイデルベルク近くの宮中伯所領などから供給されたと考えられるが、中世末には、所領からの現物供給は後退し、都市の市場を通じた調達⁽¹⁹⁾の比重が高まった。宮廷関係の人員は城の近くに居住しており、また宮廷の人員は独自の兄弟団 (bruderschaft des hofgesindes) をも結成していた。⁽²⁰⁾ ハイデルベルク市の都市参事会員の中にも、この兄弟団のメンバーになっている者がおり、宮廷都市としてのハイデルベルク市の性格をうかがわせる。宮中伯フィリップのもとで一五〇〇年に制定された調理所規則 *Küchenordnung* は、宮廷で宮廷構成員に供される食材について規定しているが、高価な香辛料などの管理を強め、コストを削減しようという君主側の意向を示している。⁽²¹⁾ 以上のような、中世後期におけるハイデルベルクの発展は、君主の宮廷を中心とする領邦支配の発展を反映する現象であった。その際、領邦君主のもとでの官庁の形成にとどまらず、宮廷の維持とそこでの儀式、宗教的・学問的中心の確立といった幅広い中心地機能が集積されていったのであった。狭義の領邦支配の外へ放射される影響力を含めて、宮廷所在地には宮中伯の支配の広がり⁽²²⁾が映し出されていたのである。

(g) 文化的中心としての宮廷

ハイデルベルクで展開される文化活動もまた、プファルツ領邦とその影響力の発展を示す一つの指標である。特に、一五世紀後半の宮中伯フリードリヒ一世およびフィリップのもとで、ハイデルベルクのプファルツ宮廷はドイツにおける初期人文主義の中心の一つとなった。⁽²³⁾

既に一四世紀末以来、宮廷において、宮中伯やその妻のための翻訳や写本作成が行われたことが知られている。ルートヴィヒ三世は、一五〇以上の神学・法学・医学関係の写本を持ち、このコレクションは彼の死後ハイデルベルク大学に遺贈されて大学蔵書の重要な部分を構成することになった。フリードリヒ一世も、一〇〇以上の写本を含むコレクシ

ンを有し、その四分の一は古典作家の作品であった⁽²³⁾。一五世紀後半には、君主子弟の教師としても、学者が招かれた。フリードリヒ一世のもので、ペーター・ルーダー Peter Luder、ペトルス・アントニウス・デ・クラピス Petrus Antonius de Clapis、ヤーコプ・ヴィムプフェリング Jakob Wimpfeling などの人文主義者が宮廷で活動した。彼らはフリードリヒの地位と行動を正当化するための文筆活動をも展開した⁽²⁴⁾。このうち、ペーター・ルーダーは、ハイデルベルク大学で自由学芸を学んだ後、イタリアへ向かい、フェラーラで特にヴェローナのグアリーノ Guarino に学んだ他、パドヴァ大学でも勉強した⁽²⁵⁾。彼は一四五六年にフリードリヒ一世によってハイデルベルクに招かれる。その人文主義的風は、ハイデルベルク大学の学者たちからは抵抗を受けるが、宮廷では支持者を見いだした⁽²⁶⁾。一四五八年には、フリードリヒ一世のための称賛演説を発表し、一四六〇年にも宮中伯のために別の詩を作るが、同年のうちにハイデルベルクから去った。

また、北イタリアのリグリア出身のペトルス・アントニウス・デ・クラピスは、人文主義者マリオ・フィレルフォ Mario Filelfo に学び、一四六四年からバーゼル大学の自由学芸学部で教え、翌一四六五年には同大学でローマ法の学位も取得した⁽²⁷⁾。しかし彼は、既に同年のうちにハイデルベルクに移り、宮中伯フリードリヒ一世に仕えた。彼は既に一四六四年にフリードリヒに君主鑑を献呈していた⁽²⁸⁾。ペトルスはフリードリヒ一世の宮廷で、その人文主義的学識を生かして地歩を占めた他、特に教皇庁への使節として何度も派遣された⁽²⁹⁾。

宮中伯フィリップの宮廷もまた、人文主義者の活動の舞台となった。コンラート・ケルティス Conrad Celtis は、一四九五年にハイデルベルクで、イタリア各地の手本にならってドイツで初めての人文主義アカデミーを設立した⁽³⁰⁾。ヤーコプ・ヴィムプフェリングも、一四九八年に、宮中伯フィリップの息子フィリップおよびルートヴィヒ五世に献呈した君主鑑を執筆した⁽³¹⁾。それまで主にヴェルテンベルクの宮廷で活動していたヨハネス・ロイヒリン Johannes Reuchlin も、

宮中伯フィリップの息子たちの教師としてハイデルベルクに迎えられ、書記局長 Kanzler のヨハン・フォン・ダルベルク Johann von Dalberg をはじめとする人文主義者たちと交際した⁽³⁵⁾。

君主本人以外には、書記局長のルートヴィヒ・フォン・アスト Ludwig von Ast⁽³⁶⁾、マティアス・ラムング Mathias Ramung⁽³⁷⁾、前述のヨハン・フォン・ダルベルクらが人文主義者サークルの援助者であった。

またマティアス・フォン・ケムナート Mathias von Kemnath⁽³⁸⁾、ミツヒェル・ベハイム Michel Beheim⁽³⁹⁾、ラインボルト・シュレヒト Reinhold Slecht⁽⁴⁰⁾らによる、宮廷とその周辺で成立した歴史叙述も、宮中伯フリードリヒ一世のために実用的機能を果たした。例えば、マティアス・フォン・ケムナートの年代記は、帝国史・教会史・地方史に関する記述と系譜的情報によって、プファルツの帝国・教会政策に歴史的根拠素材を提供し、フリードリヒ一世の問題含みの支配掌握を正当化して、それを皇帝フリードリヒ三世やその他のプファルツの敵対者からの攻撃から擁護する機能を果たしたのであった。また、プファルツ宮廷では一五世紀初めから、宮廷合唱隊 Hofkantorei の存在が史料上確認され、一五世紀後半のフリードリヒ一世の時代には、宮中伯は質の高い合唱隊を宮廷に抱えていた他、当時先進的であった低地地方の音楽家たちをも宮廷に迎えていた⁽⁴¹⁾。

一四七四年に上プファルツ Oberpfalz のアムベルク Amberg で行われた宮中伯後継者フィリップとバイエルン・ラズフート公ルートヴィヒ (富裕公) Ludwig der Reiche の娘マルガレーテとの結婚式は、この時代のプファルツ宮廷の最も華やかな儀式の一つであった⁽⁴²⁾。この機会に、フィリップの上プファルツでの宮廷のために宮廷条令 Hofordnung も制定されている⁽⁴³⁾。

こうしてプファルツ宮廷は、特に一五世紀後半において、文化的中心としても旺盛な活力と高い威信を示したのであった。このような宮廷を維持・展開することは、狭義の領邦にとどまらず、領邦外に広がるライン宮中伯の政治的影響力

にとつても、少なからぬ意味を持ったものと考えられる。

(二) ハイデルベルク大学

ハイデルベルク市とプファルツ宮廷の発展にとつて、一三八六年にハイデルベルク大学が設立されたことは、大きな意義を持った⁽⁴²⁾。全体として見た場合、大学の存在は、既に述べたハイデルベルクの宮廷所在地としての発展とプファルツ宮廷における統治の学識化傾向を促進したのである。

大学創設には、一三七八年の教会大分裂の勃発という全ヨーロッパ的事件が規定的に作用した⁽⁴³⁾。フランスとパリ大学が当初アヴィニヨンの教皇を支持したのに対して、ローマ支持のドイツ出身の教師・学生はパリを離れ、別に活動の場を求めた。この動向を背景に、宮中伯ループレヒト一世は、ハイデルベルクでの大学創設を企図した。ローマの教皇ウルバヌス六世の創立特権状は一三八五年一〇月に作成され、一三八六年六月に宮中伯のもとへもたらされた。実際に講義が開始されたのは同年一〇月のことであつた⁽⁴⁴⁾。設立に際しては、例えば領邦統治にあたる官吏を養成するといった「実務的」目的ではなく、既に大学を擁していたルクセンブルク家のブラハやハープスブルク家のヴィーンに對抗して家門の威信を高めるといふ側面が、強く作用したものと考えられる⁽⁴⁵⁾。ハイデルベルク大学の創設も、その意味で、中世後期ドイツの領邦における君主家門という要素の重要性を示す現象と言えるであらう。

教師として大学設立を主導したのは、パリで教えていたマルシリウス・フォン・インゲン Marsilius von Inghen⁽⁴⁷⁾であつた。当初の大学の組織はパリを模範とするものだったが、一三八六年から活動を始めたのは神学部と自由学芸学部で、法学部と医学部の開始はやや遅れたようである。またパリ・モデルはその後、ハイデルベルクの実情に合わせて修

正され、例えば同郷団 *natio* システムは廃止され、学頭 *rector* は自由学芸学部のみからでなく、四学部から選ばれるようになった。⁽⁴⁹⁾

大学の財政的基盤は、一三九八年にシュパイアー、ヴォルムスなどの八つの教会の合計一二の参事会員聖職禄がローマの教皇ボニファティウス九世の特権状により大学に統合され、また一四一三年にハイデルベルクの聖霊参事会教会 *Heiligegeiststift* の九つの参事会員聖職禄が大学のために確保されるなどして、拡充された。それに伴い、設立当初は三人にすぎなかった教師陣も増員され、一四一三年以後には、神学部三、法学部三、医学部一、自由学芸学部六の講座を数えるに至った。⁽⁵²⁾ 最初の世代の教師たちは、前述のようにパリからやってきた他、ドイツ人とチェコ人の対立が激しくなっていたブラハ大学からも数多く移ってきており、⁽⁵³⁾ 教師陣の面でハイデルベルクがこの対立からも利を得たことがうかがわれる。法学部でローマ法の講座が正式に設けられたのは、ドイツの大半の大学と同様かなり遅く、一四五二年になつてからであつた。⁽⁵⁴⁾

ハイデルベルクを訪れる学生の数、ドイツ各地における大学新設にも影響されて、創立当初を除けばドイツの大学の中でも少ない方であり、⁽⁵⁵⁾ また多くの大学所在地と同様、学生と市民との間の対立も絶えなかつたとはいえ、⁽⁵⁶⁾ 大学の存在はハイデルベルク市の発展にとって重要な刺激となつた。⁽⁵⁷⁾ また、ハイデルベルク大学の教師たちは、既に見たように、宮中伯宮廷の顧問などとして宮中伯の統治を支え、とりわけ一五世紀に進展した政治・外交の学識化の中で、宮中伯にとって不可欠の存在になつていった。このような意味で、ハイデルベルク大学は宮中伯支配の基盤の一つとなつたのである。それに対応して宮中伯の側も、時に積極的に大学へ介入した。例えば宮中伯フリードリヒ一世は、一四五二年に大学の組織や教育を改革し、名目論と実在論の対立に関して両派の同権の確保につとめた。⁽⁵⁸⁾ この宮中伯のもとで、ハイデルベルク大学は、教師の構成、学生の出身地と学業後の活動先などの点で、近世的な領邦大学としての性格を強

めていくことになった。⁽⁵⁹⁾ また彼は、前述のように、ペーター・ルーダーをハイデルベルク大学に招聘したが、大学では一部の教師が人文主義を受け入れたに過ぎず、プファルツにおける人文主義は既述のように宮廷を拠点に展開したのであった。⁽⁶⁰⁾

(三) アムト制と地方行政

中世後期ドイツの領邦において、君主が有する諸権利・諸収入は、次第にアムトと呼ばれる単位にまとめられて管理されるようになり、それぞれのアムトは空間的にも徐々に管轄の境界を有するようになっていった。⁽⁶¹⁾ そのような展開によって、領邦君主の支配は時間をかけながらもより深く社会の下層へ及んでいくこととなった。

プファルツの支配拡大にとって、王権からの質入れが非常に大きな意味を持っていたことは前述したが、宮中伯はそれ以外にも、近隣勢力からの質入れや購入により、支配を拡大していった。⁽⁶²⁾ 例えば一三四九年には、ブレッテン Brettan がエーバーシュタイン Eberstein 伯から購入され、⁽⁶³⁾ 一三五八年までにはジンメルン Simmern がラウグラーフ Raugraf から獲得された。⁽⁶⁴⁾ 一三七〇年にはラーデンブルク Ladenburg の半分が、ヴォルフ・フォン・メッケンハイム Wolf von Meckenheim から購入され、⁽⁶⁵⁾ その他、ボランデン Bolanden およびツヴァイブリュッケン Zweibrücken 伯領の半分などが獲得された。⁽⁶⁶⁾ このように集積されていった土地支配、その他の収入源、地方における裁判権などは、プファルツでもアムトにまとめられていく。⁽⁶⁸⁾ アムトには、名称はさまざまだが、家人や貴族出身の責任者が置かれ、宮中伯を代理した。

地方行政の役職としては、既に一三世紀前半からハイデルベルクのフォークト Vogt の存在が知られる。⁽⁶⁹⁾ また

一二六二年にはノイシュタット Neustadt a. d. Hardt (a. d. Weinstraße) のフォークトが史料に登場する⁽⁷⁰⁾。これとは別に一三世紀後半には、ラインのヴィットゥーム Vitzum がライン地方全体における宮中伯の代理人として登場する⁽⁷¹⁾。とりわけ一二八〇、九〇年代には、ハインリヒ・フォン・ザクセンハウゼン Heinrich von Sachsenhausen がラインのヴィットゥームとして活動している⁽⁷²⁾。ルードルフ一世のもとでも、ゴットフリート・デア・パウラー Gottfried der Pauler をはじめとして、何人かのラインのヴィットゥームが任命された⁽⁷³⁾。これらのヴィットゥームは君主の分身として、司法・軍事・財務上の統治行為を行った⁽⁷⁴⁾。また、ルードルフ一世のもとで、ハイデルベルク、ノイシュタット、リンデンフェルス Lindfels、バッハラッハ Bacharach のフォークトが史料に登場する⁽⁷⁵⁾。

一二二九年のパヴァリア条約の後、おそらくラインのヴィットゥームはハイデルベルクのヴィットゥームとなり、一二三三年にはそれと並んでノイシュタットのヴィットゥームが登場する⁽⁷⁶⁾。その後ハイデルベルクのヴィットゥームは、クネーベル Knebel、エアリッヒハイム Erligheim、ローゼンベルク Rosenberg などの家系により、ノイシュタットのそれは、クネーベル、ヒルシュホルン Hirschhorn、ラントシャート・フォン・シュタイナッハ Landschad von Steinach、ジッキンゲン Sickingen などの家系により占められた⁽⁷⁸⁾。宮廷役職や顧問の所で既に見たような、ライン宮中伯と関係の深い下級貴族、特にクライヒガウ Kraichgau の下級貴族が、こうした地方役職の面でも重きをなしていたわけである。他に一二五〇年代にはアルツァイ Alzey のヴィットゥームが登場する⁽⁷⁹⁾。これらのヴィットゥームも、やはりそれぞれの地点において宮中伯本人の分身の役割を果たし、収入徴収と管理、司法、軍事などの分野で活動した⁽⁸⁰⁾。ループレヒト一世のもとでは、ブレッテン、ゲルマースハイム Gernersheim、ハイデルベルク、リンデンフェルス、モスバッハ Mosbach などの地点でフォークトが登場する⁽⁸¹⁾。他に、特に財務を担当し、またヴィットゥームの代理や文書の保管にもあたった地方書記 Landschreiber が、ハイデルベルク、ノイシュタット、オッペンハイムで知ら

(82) れる。

このようなアムトを通じた地方行財政のために、さまざまな文書も作成・運用された。最古の所領台帳 *Urbar* として、一三六九年のものが伝わっている。⁽⁸³⁾ いわゆるハイデルベルクのアムト台帳 *Heidelberger Amtsbuch* で、ハイデルベルクとブレッテンを除くライン右岸における宮中伯の諸権利・諸収入を記載しているが、おそらく未完に終わったものと考えられている。

ヴィッツトゥーム、フォークト、および後述の流通税徴収にあたった税関吏 *Zöllner* らの地方役人は、遅くとも一四世紀後半には、宮中伯に会計報告を行うよう求められていたらしい。また宮中伯の方は、もたらされた収入について受取証を発行したようである。そのような宮中伯と地方役人とのやりとりにおいて、決算の結果、(役人が任期中自己の出費で活動していたために) 宮中伯の方が役人に対して債務を負った状態になっている例が見られるのは、中世後期の統治の実情をうかがわせる現象と言える。⁽⁸⁴⁾ またループレヒト一世のもとで、一般の地方役人の会計報告が現地で行われたのに対して、流通税関係の報告はハイデルベルクでなされており、財務管理分野における集権化傾向として注目される。⁽⁸⁵⁾ もっとも、プファルツ中央において財務機関が確立するのは、前述のように一五世紀後半になってからであった。

城塞も、プファルツの地方統治にとって本質的な重要性を持っていた。⁽⁸⁶⁾ 宮中伯は、後述のようなレーンとして授与する城塞とは別に、自前の城塞を獲得・建設・保持した。城塞の責任者として、アルツアイ、アルテン・バウムブルク *Alten-Baumburg*、カウプ *Kaub*、エーレンブルク *Ehrenburg*、フルステンベルク *Fürstenberg*、ゲルマースハイム、グレンフェルス *Gollentfels*、ハンブーシュタイン *Hammerstein*、ヘムスバッハ *Hemsbach*、ループレヒツエック *Ruprechtseck*、シュタールベルク *Stahlberg*、シュターレック *Stahleck*、シュトルツェンエック *Stolzeneck*、シュトロムベルク *Stromberg*、トリーフフェルス *Trifels*、ヴァッピェンハイム *Wachenheim*、ヴィルトベルク *Wildberg* の各城で

ブルクグラーフ Burggraf の存在が知られる⁽⁸⁷⁾。特に、カウプ、フルステンベルク、シュタールベルク、シュトロムベルクのブルクグラーフは比較的多くの史料に登場している。

これらの城塞には、主に下級貴族がブルクマンの地位を占め、ブルクレーンなどを得て、見返りに城塞守備にあたった。ブルクレーンの受領は、本来城塞駐屯の義務を伴ったが、一四世紀には緩和されて、駐屯の代理も許容された⁽⁸⁸⁾。ループレヒト一世のもとでは、アルツアイ、バッハラッハ Bachrach、カイザーズラウテルン Kaiserslautern、カウプ、キルケル Kirkel、フルステンベルク、ゲルマースハイム、ハビッツハイム Habitzheim、ハッツハイム Hatsheim、ハイデルベルク、ヘルツォークシュタイン Herzogstein、リンデンフェルス、レーヴェンシュタイン Löwenstein、ノイエンプルク Neuenburg、オッペンハイム Oppenheim、オーデルンハイム Odernheim、プファルツグラーフエンシュタイン Pfalzgrafenstein、シュヴァーブスブルク Schwabsburg、シュタールベルク、シュターレック、シュトラールンベルク Strahlenberg、シュトロムベルク、ザウアーブルク Sauerburg、ヴァインハイム Weinheim、ヴィースロッホ Wiesloch、ヴォルフスベルク Wolfsberg でプファルツのブルクマンの存在が確認される⁽⁸⁹⁾。

ライン宮中伯の地方支配は、一五世紀後半のフリードリヒ一世の時代に、彼のもとでの支配領域の拡大と平行して更に発展し、かなりの程度統一化がすすめられた⁽⁹¹⁾。ヴィッツトゥーム職の名称はいくつかの地点で維持されたが、その地位は今や他の地点におけるアムトマンと同列になった。合計一八のアムトは、オーバーアムト Oberamt とアムトという二段階に整備され、当初は財政分野を担当した市民出身の地方書記 Landschreiber の役割が貴族出身のアムトマンに対して増大し、次第に地方書記がアムトにおける実質的な責任者となった⁽⁹²⁾。

フリードリヒ一世はまた、地方支配の末端において、管轄などの点で均質な村落裁判所の設立につとめた⁽⁹³⁾。村落裁判所は、宮中伯の狭義の土地支配に対してだけでなく、他の領主の所領に対しても管轄権を主張した。村落裁判所に対す

る支配権は、なおかなりの地点で別の領邦君主などによってプファルツと共有されていたが、宮中伯はその排除をすめていった。⁽⁹⁴⁾ もつとも、オーバーアムト・アルツアイのようにプファルツの稠密な支配が建設された所でも、なお近世に至るまで、プファルツが他の領主と村落裁判所支配権を共有する地点が残っていたことにも注意が必要であろう。⁽⁹⁵⁾ プファルツ領邦支配の「オープンな」性格は、このような点にもあらわれているのである。しかしそれでも、村落裁判所の重要性が増すことにより、土地領主裁判所（いわゆる Hubgericht）において裁判権をも行使していた宮中伯以外の聖俗土地領主の支配権は次第に縮減されていった。⁽⁹⁶⁾ また、平行して、農村ゲマインデの形成も完結していき、村落住民は農村ゲマインデを単位として領邦臣民に組織されることとなった。⁽⁹⁷⁾

村落裁判所は民事事件の他、下級の刑事事件をも管轄した。重大な刑事事件はライン左岸ではアムトマンの管轄であったが、ライン右岸の多くの地域ではツェント裁判所 *Zentgericht* で扱われた。⁽⁹⁸⁾ これらのツェント裁判所については、プファルツの関与のもとで既に一四三〇年に、宮中伯を裁判君主と宣言する法判告 *Westum* が出されていたが、⁽⁹⁹⁾ 一五世紀末までにはおおむね宮中伯の影響下に置かれた。宮中伯は、ツェントにおける法判告や証言聴取を通じて、マインツ大司教、シュパイアー司教、エアバッハ家など、隣接する領邦君主に対して自己の支配領域を画定し、支配権を確立する政策をすすめていった。⁽¹⁰⁰⁾

都市もまた、中世後期ドイツの領邦における地方支配の強化にとつて、少なからぬ意味を持った。⁽¹⁰¹⁾ 宮中伯は、いくつかのアムト中心地点などで都市育成政策を展開した。⁽¹⁰²⁾ 宮中伯ルートヴィヒ二世のもとで、一二六四年頃にヴァインハイムの新市 *Neustadt* が建設され、一二七五年には既に都市化しつつあったノイシュタットのために国王ルードルフ一世の特権状が、一二七七年にはやはり都市化の過程にあったアルツアイのために同国王の特権状が獲得された。⁽¹⁰⁴⁾ またループレヒト一世は、一三五六年にバッハラッハに都市参事会を設置した。⁽¹⁰⁵⁾ ここではケルン大司教がグルントヘルシャフト

を持ち、宮中伯はフォークタイのみを持つという複雑な状況が存したが、その中で都市参事会の登場は、大司教のシュルトハイス Schuttheiß とその裁判所の権力を排除し、プファルツの支配を強化することにつながった。また、とりわけ一四世紀後半にハイデルベルク市の発展が宮中伯によって促進されたのは、前述のとおりである。

これらの都市は、城のブルクマンと貴族たちの存在が無視できない意味を持っていた都市（アルツアイ、バッハラツハ）とそうでない都市（ノイシュタット）という違いはあっても、概して宮中伯の強力な支配のもとに置かれた。⁽¹⁰⁷⁾ 宮中伯の代理人であるシュルトハイスが、都市を支配し、裁判を主催した。これに対して、都市を拠点とするヴィッツトゥーム、フォークト、アムトマンなどは、主に都市外の農村部の権益を管理した。もちろん他方で、これらの都市では市民団体の都市参事会が形成されるが、シュルトハイスの裁判所に対する参事会独自の裁判権はあまり発達しなかった。参事会員は、同時にシュルトハイス裁判所の参審人を兼ねた。特に宮廷所在地となったハイデルベルクでは、前述のように、宮中伯が市長と都市参事会員の任免権を掌握していた。またプファルツ支配下の都市でツンフトが都市制度上大きな役割を果たすことは、ほとんどなかった。

更にフリードリヒ一世とフリーリップのもとで、宮中伯の都市支配は強化され、とりわけ財政面での都市把握がすすんだ。宮中伯は都市の担税力を増し、周囲から人を都市へ引きつけるために、都市の特権を確認し、あるいは新たに年市特権などを与えた。⁽¹⁰⁸⁾ それと平行して都市における宮中伯役人の権限拡大もはかられた。フリードリヒは、一四五〇ー六〇年代に、アルツアイ、バッハラツハ、ハイデルベルクに特権状を発行し、従来の租税から免除する代わりに、都市で徴収される消費税 Ungeld の一定割合を宮中伯に納めさせた。もつとも、プファルツの支配はこの時点では都市参事会を通じてのもので、個々の市民を直接把握しようとはしていなかった。⁽¹⁰⁹⁾ このような財政的要求に対して、一四八〇年代のノイシュタットの騒擾のように抵抗が起きることもあったが、そのような動きは例外的であった。⁽¹¹⁰⁾ ただし、オッペ

ンハイム Oppenheim、オーデルンハイム Odernheim のような、もともと国王領に属し、質入れを経てプファルツ支配下に入ったような都市では、宮中伯の都市支配に対して市民側からの比較的強い抵抗が見られた⁽¹¹⁾。全体として、プファルツ領邦内の諸都市は、宮中伯による保護と育成を享受する一方で、宮中伯により掌握され、市民団体による都市自治の展開も狭い枠内にとどまった。そうした状態にあった諸都市が、支配中心として、また軍事・財政上の貢献の点で、領邦支配確立のために果たした役割は無視できないものがあつたのである。

(四) 教会政策

中世後期ドイツの諸領邦の君主は、教会分野においても、徐々に支配権を強化していった⁽¹²⁾。プファルツ系ヴィッテルスバッハ家と教会・修道院との関係を見ると、一二世紀から宮中伯は、シェーナウ Schöna、ルーペルツベルク Rupertsberg、エーバーバッハ Eberbach、オイサータール Eufenthal、オッターベルク Otterberg などいくつかの修道院に特権を与えている⁽¹³⁾。一四世紀以降も、オッターベルク、シェーナウ、ローベンフェルト Lobenfelf、ゲルマースハイム Gemersheim、フランケンタール Frankental、リンブルク Limburg、ヒルザウ Hirsau、マウルブロン Maulbronn など領内・領外の修道院の保護者として登場したり、その財産の保全に配慮したりすることは、しばしば見られた⁽¹⁴⁾。このうち、もともと王権の保護下にあったマウルブロン修道院は、一三七〇年代に皇帝カール四世により、期限付きで宮中伯の保護に委ねられ、その後プファルツの領邦支配に組み込まれていった⁽¹⁵⁾。

宮中伯による、ノイシュタットにおける参事会教会 Stiftskirche の設定や、ハイデルベルクにおける聖霊参事会教会 Heiligegeiststift の寄進と建設については、墓所の項目で既に言及したところである⁽¹⁶⁾。

宮中伯の教会への影響力行使のルートとして、一つには、宮中伯が持つ保護権 *Patronatsrecht* が考えられる。一四九八年に宮中伯フィリップが作成させたリストに、上プファルツを含めた一覧が記録されているが、ヴォルムス司教区やシュバイアー司教区における聖職禄の全体数およびそこにおける保護権の保有者全体と比較すると、プファルツ保有分は数量的にはそれほど多くない。ヴォルムス司教区では全体の二割以下（三七六中三四）である⁽¹⁸⁾。しかし、同リスト冒頭には、プファルツの保護権により職を得た聖職者が行うべき宣誓の文言、プファルツによる推薦の書式、聖職禄の管理についての宮中伯の役人達への指令が記されており、宮中伯による保護権把握強化の動きをうかがわせる。その他、フリードリヒ一世以降、教区司祭人事の掌握も進展した。

ライン宮中伯の教会政策は、中世後期にすすめられた修道院改革とも連動していた⁽¹⁹⁾。宮中伯ルートヴィヒ三世とルートヴィヒ四世は、ヴォルムス近郊のドミニコ会女子修道院リーベナウ *Liebenau*、ホーホハイム *Hochheim*、ヴォルムスのドミニコ会修道院、ヴォルムスの郊外 *Vorstadt* のシトー会修道院 *Nonnenmünster*、ヴォルムス近くのキルシュガルテン *Kirschgarten* 女子修道院などの修道院改革を後援した⁽²⁰⁾。最後のケースでは、宮中伯は、ヴィンデスハイム改革 *Windsheimer Chorherrenreform* の動きを支援した⁽²¹⁾。キルシュガルテンからは、広い範囲の修道院に改革の刺激が及んだ⁽²²⁾。

フリードリヒ一世のもとでも、宮中伯による修道院改革の支援と修道院把握の強化が平行にすすんだ。フリードリヒは、ブルスフェルト改革 *Bursfelder Reform* による、クリンゲンミュンスター *Klingenstein*、シュボンハイム *Sponheim*、ヴァイセンブルク *Weissenburg* などの修道院の改革を後援するとともに、それを通じて修道院内部の関係にも介入した⁽²⁴⁾。ブルスフェルト改革は、宮中伯フィリップのもとでも、リンブルク、ゼーバッハ *Seebach*、オーデンハイム *Odenheim*、ゲルマースハイムなどで行われた⁽²⁵⁾。

このように、とりわけ一五世紀に入って、ライン宮中伯の教会・修道院把握は、中世後期の修道院改革運動のような領邦外にも広がった動向とも結びつきながら、強化される傾向にあり、大きく見れば、近世の教会統治の基礎が築かれつつあったのである。

(五) 軍制

プファルツの軍制も、特に一五世紀に入って組織化が進んだ。この分野については、既に我が国でも皆川卓氏の論考⁽¹²⁶⁾があるので、ここでは概要の確認にとどめよう。⁽¹²⁷⁾

ライン宮中伯の軍事力は、中世後期の間にレーン制度による動員を主力とするものから次第に変質していった。⁽¹²⁸⁾一五世紀後半、宮中伯フリードリヒ一世のもとでは、レーン軍の他に、スイスなどから集められた傭兵が用いられた。また、防衛戦争の場合には、農民・市民の召集軍の動員も試みられた他、農民や修道院は当時いわゆる車陣などの形で頻繁に用いられた戦闘用の車の供出を義務づけられた。フリードリヒの砲兵隊は当代屈指の強力な部隊で、マルティン・メルツ Martin Meitz などの専門家がプファルツに仕えていた。騎兵は今なおレーン制によって動員された貴族によって構成されており、クライヒガウなどの下級貴族たちがプファルツの騎兵として活躍した。フリードリヒ一世は、農民・市民の召集軍を除いて、およそ一五〇〇〇の兵力を擁し、その約五分の一がレーン軍であった。このようなかなりよく整った軍が、彼の軍事的成功を支えたのである。

ランスフート継承戦争に際してのプファルツの軍備は、一五〇四年の動員台帳 *Reibuch* から知られる。⁽¹²⁹⁾これは、このときプファルツが領内から動員した兵力、および臨時に雇い入れるなどした兵力の記録であり、またプファルツ側お

よび敵側のフェーデ宣告状 *Fehdebriefe* もあわせて収録している。後述するように狭義の領邦支配に限定されず幅広く展開していたレーン関係により動員された下級貴族らの兵力の他に、傭兵や、約六〇〇〇人の農村・都市からの動員が記録されている。

このように、一六世紀初頭の時点では、ライン宮中伯の軍事力は封建騎士軍だけでなく、より多様な要素を含むものとなっていた。もともと、そこでもなお領邦を越える範囲から集まった貴族たちがプファルツ軍を構成したことには注意が必要であり、広い影響圏をかかえたプファルツの覇権的地位の反映をそこに見ることができるのである。

(六) 領邦立法

中世後期ドイツの諸領邦では、領邦君主による立法活動も展開され始める。⁽¹³¹⁾ 既に詳しく論じた支配相続関係の規制を別にすれば、ライン宮中伯の領邦立法が活発になるのは、他の多くの領邦と同様、一五世紀後半からのことである。⁽¹³¹⁾ これも前述した宮廷裁判所条令の他は、対象分野としては経済関係の立法が中心であったが、他に奢侈立法や相続関係の立法もなされた。

例としては、一四六五年のハイデルベルク市についての都市条令があるが、その経済生活関係の内容は、一四七五年のフリードリヒ一世の価格統制法で全支配領域に広げられた。また一四六五年のノイシュタット市についての奢侈条令も伝わっている。⁽¹³²⁾ その他、賭博禁止などを定めた条令も、やはり一四六五年に出されている。⁽¹³⁴⁾ 相続については、一四八四年に代襲相続を認める立法が出されたが、これはローマ法の *ius representationis* を承認するものであった。⁽¹³⁶⁾

このように、プファルツにおける領邦立法は、中央における裁判所や財務役職の整備などとともに、ようやく一五世

(Residenzenforschung, Bd. 4), Sigmaringen 1995; Christian LACKNER, Hof und Herrschaft. Rat, Kanzlei und Regierung der österreichischen Herzöge (1365-1406), (Mitteilungen des Instituts für Österreichische Geschichtsforschung, Ergänzungsbd. 41), Wien/München 2002, S. 179-217. 他に論文集として Peter JOHANEK (Hg.), Vorträge und Forschungen zur Residenzfrage, (Residenzenforschung, Bd. 1), Sigmaringen 1990; Klaus NETTMANN und Heinz-Dieter HEIMANN (Hg.), Spätmittelalterliche Residenzbildung in geistlichen Territorien Mittel- und Nordostdeutschlands, (Studien zur brandenburgischen und vergleichenden Landesgeschichte, Bd. 2), Berlin 2009. 今日ドイツの語圏外にも Residenz 形成に関する Hans PATZE und Werner PARAVICINI (Hg.), Fürstliche Residenzen im spätmittelalterlichen Europa, (Vorträge und Forschungen, Bd. 36), Sigmaringen 1991. 近世・近代の Volker Press (Hg.), Südwestdeutsche Bischofsresidenzen außerhalb der Kathedralstädte, (Veröffentlichungen der Kommission für geschichtliche Landeskunde in Baden-Württemberg, Reihe B: Forschungen, Bd. 116), Stuttgart 1992; Kurt ANDERMANN (Hg.), Residenzen. Aspekte hauptstädtischer Zentralität von der frühen Neuzeit bis zum Ende der Monarchie, (Oberrheinische Studien, Bd. 10), Sigmaringen 1992. 中世後期の神聖ローマ帝国における Residenz 形成については、千葉徳夫「中世後期サウアーリンゲンにおける建設都市について」ヴァイマルを中心として」『法律論叢』五九巻五・六号(一九八七年)五一-九六頁、同「中世末-近世の宮廷所在都市ヴァイマル」『社会科学研究』(明治大)二八巻二号(一九九〇年)一九五-二一九頁、薩摩秀登「帝国の「中心都市」ブラハ」『一橋論叢』一〇〇巻四号(一九九三年)六五五-六六七頁。

(2) Meinrad SCHAB, Die Entstehung des palzgräflichen Territoriums am unteren Neckar und die Anfänge der Stadt Heidelberg, in: ZGO 106 (1958), S. 233-276, S. 253-276; Ders., Die Anfänge Heidelbergs. Alte Zeugnisse und neue Befunde im Rahmen der stauferzeitlichen Stadtgenese in Südwestdeutschland, in: Eugen REINHARD und Peter RÜCKER(Hg.), Staufische Stadtgründungen am Oberrhein, (Oberrheinische Studien, Bd. 15), Sigmaringen 1998, S. 185-212; Hermann EHMER, Heidelberg. Residenz der Pfälzer Kurfürsten bis 1720, in: Kurt ANDERMANN(Hg.), Residenzen (註一), S. 297-321; Arnold SCHNEURBRANDT, Heidelbergs Aufstieg und Niedergang in kurpfälzischer Zeit. Gründung und Entwicklung von der „churfürstlichen Residenzstadt“ zur „zweiten Haupt- und ehemaligen Residenzstadt“, in: Elmar MITTEL(Hg.), Heidelberg. Geschichte und Gestalt, Heidelberg 1996, S. 48-87; Johann KOLB, Heidelberg. Die Entstehung einer landesherrlichen

Residenz im 14. Jahrhundert, (Residenzforschung, Bd. 8), Sigmaringen 1999; Achim WENDT und Manfred BENNER, Das Heidelberger Schloss im Mittelalter. Bauliche Entwicklung, Funktion und Geschichte vom 13. bis zum 15. Jahrhundert, in: Volker RÖDEL (Red.), Mittelalter. Der Griff nach der Krone. Die Pfalzgrafschaft bei Rhein im Mittelalter, Regensburg 2000, S. 165-181; Wolfgang von MOERS-MESSMER, Heidelberg und seine Kurfürsten. Die große Zeit der Geschichte Heidelbergs als Haupt- und Residenzstadt der Kurpfalz, Ubstadt – Weier 2001, S. 11 ff.; Volker RÖDEL, Art. Heidelberg, in: Werner PARAVICINI(Hg.), Höfe und Residenzen im spätmittelalterlichen Reich. Ein dynastisch-topographisches Handbuch, Teilbd. 2: Residenzen, (Residenzenforschung, Bd.15. 1), Ostfildern 2003, S. 259-262.

- (㉔) ヴァイッテルスバッハ家の宮中伯への授封証書として伝わる最古の文書は、一二二五年にヴォルムス司教ハインリヒが宮中伯ルートヴィヒ一世、その妻アグネス、その子オットー二世に与えたもの（以下略）。Meinrad SCHAAB (Hg.), Rüdiger LENZ (Bearb.), Ausgewählte Urkunden zur Territorialgeschichte der Kurpfalz 1156-1505, (Veröffentlichungen der Kommission für geschichtliche Landeskunde in Baden-Württemberg, Reihe A: Quellen, Bd. 41), Stuttgart 1998, Nr. 12, „... et vobis et successoribus dictis in feodum concedimus et assignamus ... castrum in Heidelberg cum burgo ipsius castri ...“ M. SCHAAB, Entstehung (注㉔), S. 253 ff.; H. EHMER, a. a. O. (注㉔), S. 297.

- (4) ハイデルベルクにはまず宮中伯の城が築かれたが、それに対して都市建設をいつの時点とするかは、現在まで結論を見ない。近年の考古学的調査結果などから一二二四年から一二二五年の間に都市建設がなされたとする Achim WENDT und Manfred BENNER, 800 Jahre Heidelberg – Archäologische und bauhistorische Befunde zu den Anfängen der Stadt, in: ZGO 145 (1997), S. 15-60 以下（以下略）。M. SCHAAB, Anfänge (注㉔), S. 191 ff. は、一二世紀中の建設の可能性をなげき定めている。

- (5) 遅くとも一二二〇年代後半にハイデルベルクの市民たちが発行した証書には、既に市の印章が付わっている。M. SCHAAB, Entstehung (注㉔), S. 272; Joachim DAHHAUS, Zu den ältesten Siegeln der Städte Heidelberg und Neustadt an der Weinstraße, in: ZGO 147 (1999), S. 113-143, S. 120. ハイデルベルクの都市としての立地条件について、M. SCHAAB, Entstehung (注㉔), S. 255 ff.; DERS., Anfänge (注㉔), S. 187 f. ハイデルベルクにおける都市と市民団体の発展史について、M. SCHAAB, Entstehung (注㉔), S. 258 ff.; H. EHMER, a. a. O. (注㉔), S. 305 ff. 一二八七年には都市参事会 consules が史料に現れる。

- (6) J. Kolb, a. a. O. (注2), S. 41 ff. コルプの調査によると、ハイデルベルクでの滞在回数二三回に対して、ゲルマースハイム Gernersheim 四三、バツハラツハ Bacharach 三三、ノイシュタット Neustadt 二七などとなっている。なお Ebenda, S. 42 の表からは、ルードルフ一世（および後の国王ルートヴィヒ四世）までの宮中伯が主にバイエルンに滞在していたことが明らかである。しかし彼らの時代でも、ハイデルベルクはライン地方の支配拠点の中では最も頻繁に宮中伯が訪れていた地点であった。
- (7) J. Kolb, a. a. O. (注2), S. 48 ff. この面ではハイデルベルクにおける証書発行数七一〇に対して、ゲルマースハイム七四、バツハラツハ五四、ノイシュタット三〇などとなっている。また Ebenda, S. 49 の表からは、ルードルフ一世（および後の国王ルートヴィヒ四世）までの宮中伯たちについて、やはり滞在頻度の面と同じ所見が得られる。
- (8) J. Kolb, a. a. O. (注2), S. 57 ff. なお、ループレヒト一世が叙述史料な²⁶ Herzog von Heidelberg と呼ばれることがあつたのは、彼の²⁷著しく進展したハイデルベルクの Residenz 化を反映したものと見ることができ²⁸。J. Kolb, a. a. O. (注2), S. 88 f.
- (9) J. Kolb, a. a. O. (注2), S. 79 f.; Richard Schröder und Carl Köhne (Bearb.), *Oberheinische Stadtrechte*, 1. Abt.: *Fränkische Rechte*, Heidelberg 1895-1922, 5. Heft: Heidelberg, Mosbach, Neckargmünd, Adelsheim, S. 476.
- (10) J. Kolb, a. a. O. (注2), S. 81 ff.; H. Ehmer, a. a. O. (注2), S. 318 ff.
- (11) J. Kolb, a. a. O. (注2), S. 63 ff.; H. Ehmer, a. a. O. (注2), S. 307, R. Schröder - C. Köhne, a. a. O. (注2), S. 473 (宮中伯の²⁹*Stadordnung*, Art. 3, „Kein burgermeister oder rahspersonen ohne Pfalz oder dero beamten vorwissen und bewilligen nicht setzen oder einsetzen, Pfalz aber mag demselb, wann es sie gut dunkt, thun.“ 473 Art. 5, „Kein ordnung und satzung ohne Pfalz vorwissen in der stat zu machen.“ Ebenda, S. 473 ff. (市制側³⁰は³¹市制令³²の³³条³⁴の³⁵第³⁶款³⁷の³⁸第³⁹項⁴⁰の⁴¹第⁴²款⁴³の⁴⁴第⁴⁵款⁴⁶の⁴⁷第⁴⁸款⁴⁹の⁵⁰第⁵¹款⁵²の⁵³第⁵⁴款⁵⁵の⁵⁶第⁵⁷款⁵⁸の⁵⁹第⁶⁰款⁶¹の⁶²第⁶³款⁶⁴の⁶⁵第⁶⁶款⁶⁷の⁶⁸第⁶⁹款⁷⁰の⁷¹第⁷²款⁷³の⁷⁴第⁷⁵款⁷⁶の⁷⁷第⁷⁸款⁷⁹の⁸⁰第⁸¹款⁸²の⁸³第⁸⁴款⁸⁵の⁸⁶第⁸⁷款⁸⁸の⁸⁹第⁹⁰款⁹¹の⁹²第⁹³款⁹⁴の⁹⁵第⁹⁶款⁹⁷の⁹⁸第⁹⁹款¹⁰⁰の¹⁰¹第¹⁰²款¹⁰³の¹⁰⁴第¹⁰⁵款¹⁰⁶の¹⁰⁷第¹⁰⁸款¹⁰⁹の¹¹⁰第¹¹¹款¹¹²の¹¹³第¹¹⁴款¹¹⁵の¹¹⁶第¹¹⁷款¹¹⁸の¹¹⁹第¹²⁰款¹²¹の¹²²第¹²³款¹²⁴の¹²⁵第¹²⁶款¹²⁷の¹²⁸第¹²⁹款¹³⁰の¹³¹第¹³²款¹³³の¹³⁴第¹³⁵款¹³⁶の¹³⁷第¹³⁸款¹³⁹の¹⁴⁰第¹⁴¹款¹⁴²の¹⁴³第¹⁴⁴款¹⁴⁵の¹⁴⁶第¹⁴⁷款¹⁴⁸の¹⁴⁹第¹⁵⁰款¹⁵¹の¹⁵²第¹⁵³款¹⁵⁴の¹⁵⁵第¹⁵⁶款¹⁵⁷の¹⁵⁸第¹⁵⁹款¹⁶⁰の¹⁶¹第¹⁶²款¹⁶³の¹⁶⁴第¹⁶⁵款¹⁶⁶の¹⁶⁷第¹⁶⁸款¹⁶⁹の¹⁷⁰第¹⁷¹款¹⁷²の¹⁷³第¹⁷⁴款¹⁷⁵の¹⁷⁶第¹⁷⁷款¹⁷⁸の¹⁷⁹第¹⁸⁰款¹⁸¹の¹⁸²第¹⁸³款¹⁸⁴の¹⁸⁵第¹⁸⁶款¹⁸⁷の¹⁸⁸第¹⁸⁹款¹⁹⁰の¹⁹¹第¹⁹²款¹⁹³の¹⁹⁴第¹⁹⁵款¹⁹⁶の¹⁹⁷第¹⁹⁸款¹⁹⁹の²⁰⁰第²⁰¹款²⁰²の²⁰³第²⁰⁴款²⁰⁵の²⁰⁶第²⁰⁷款²⁰⁸の²⁰⁹第²¹⁰款²¹¹の²¹²第²¹³款²¹⁴の²¹⁵第²¹⁶款²¹⁷の²¹⁸第²¹⁹款²²⁰の²²¹第²²²款²²³の²²⁴第²²⁵款²²⁶の²²⁷第²²⁸款²²⁹の²³⁰第²³¹款²³²の²³³第²³⁴款²³⁵の²³⁶第²³⁷款²³⁸の²³⁹第²⁴⁰款²⁴¹の²⁴²第²⁴³款²⁴⁴の²⁴⁵第²⁴⁶款²⁴⁷の²⁴⁸第²⁴⁹款²⁵⁰の²⁵¹第²⁵²款²⁵³の²⁵⁴第²⁵⁵款²⁵⁶の²⁵⁷第²⁵⁸款²⁵⁹の²⁶⁰第²⁶¹款²⁶²の²⁶³第²⁶⁴款²⁶⁵の²⁶⁶第²⁶⁷款²⁶⁸の²⁶⁹第²⁷⁰款²⁷¹の²⁷²第²⁷³款²⁷⁴の²⁷⁵第²⁷⁶款²⁷⁷の²⁷⁸第²⁷⁹款²⁸⁰の²⁸¹第²⁸²款²⁸³の²⁸⁴第²⁸⁵款²⁸⁶の²⁸⁷第²⁸⁸款²⁸⁹の²⁹⁰第²⁹¹款²⁹²の²⁹³第²⁹⁴款²⁹⁵の²⁹⁶第²⁹⁷款²⁹⁸の²⁹⁹第³⁰⁰款³⁰¹の³⁰²第³⁰³款³⁰⁴の³⁰⁵第³⁰⁶款³⁰⁷の³⁰⁸第³⁰⁹款³¹⁰の³¹¹第³¹²款³¹³の³¹⁴第³¹⁵款³¹⁶の³¹⁷第³¹⁸款³¹⁹の³²⁰第³²¹款³²²の³²³第³²⁴款³²⁵の³²⁶第³²⁷款³²⁸の³²⁹第³³⁰款³³¹の³³²第³³³款³³⁴の³³⁵第³³⁶款³³⁷の³³⁸第³³⁹款³⁴⁰の³⁴¹第³⁴²款³⁴³の³⁴⁴第³⁴⁵款³⁴⁶の³⁴⁷第³⁴⁸款³⁴⁹の³⁵⁰第³⁵¹款³⁵²の³⁵³第³⁵⁴款³⁵⁵の³⁵⁶第³⁵⁷款³⁵⁸の³⁵⁹第³⁶⁰款³⁶¹の³⁶²第³⁶³款³⁶⁴の³⁶⁵第³⁶⁶款³⁶⁷の³⁶⁸第³⁶⁹款³⁷⁰の³⁷¹第³⁷²款³⁷³の³⁷⁴第³⁷⁵款³⁷⁶の³⁷⁷第³⁷⁸款³⁷⁹の³⁸⁰第³⁸¹款³⁸²の³⁸³第³⁸⁴款³⁸⁵の³⁸⁶第³⁸⁷款³⁸⁸の³⁸⁹第³⁹⁰款³⁹¹の³⁹²第³⁹³款³⁹⁴の³⁹⁵第³⁹⁶款³⁹⁷の³⁹⁸第³⁹⁹款⁴⁰⁰の⁴⁰¹第⁴⁰²款⁴⁰³の⁴⁰⁴第⁴⁰⁵款⁴⁰⁶の⁴⁰⁷第⁴⁰⁸款⁴⁰⁹の⁴¹⁰第⁴¹¹款⁴¹²の⁴¹³第⁴¹⁴款⁴¹⁵の⁴¹⁶第⁴¹⁷款⁴¹⁸の⁴¹⁹第⁴²⁰款⁴²¹の⁴²²第⁴²³款⁴²⁴の⁴²⁵第⁴²⁶款⁴²⁷の⁴²⁸第⁴²⁹款⁴³⁰の⁴³¹第⁴³²款⁴³³の⁴³⁴第⁴³⁵款⁴³⁶の⁴³⁷第⁴³⁸款⁴³⁹の⁴⁴⁰第⁴⁴¹款⁴⁴²の⁴⁴³第⁴⁴⁴款⁴⁴⁵の⁴⁴⁶第⁴⁴⁷款⁴⁴⁸の⁴⁴⁹第⁴⁵⁰款⁴⁵¹の⁴⁵²第⁴⁵³款⁴⁵⁴の⁴⁵⁵第⁴⁵⁶款⁴⁵⁷の⁴⁵⁸第⁴⁵⁹款⁴⁶⁰の⁴⁶¹第⁴⁶²款⁴⁶³の⁴⁶⁴第⁴⁶⁵款⁴⁶⁶の⁴⁶⁷第⁴⁶⁸款⁴⁶⁹の⁴⁷⁰第⁴⁷¹款⁴⁷²の⁴⁷³第⁴⁷⁴款⁴⁷⁵の⁴⁷⁶第⁴⁷⁷款⁴⁷⁸の⁴⁷⁹第⁴⁸⁰款⁴⁸¹の⁴⁸²第⁴⁸³款⁴⁸⁴の⁴⁸⁵第⁴⁸⁶款⁴⁸⁷の⁴⁸⁸第⁴⁸⁹款⁴⁹⁰の⁴⁹¹第⁴⁹²款⁴⁹³の⁴⁹⁴第⁴⁹⁵款⁴⁹⁶の⁴⁹⁷第⁴⁹⁸款⁴⁹⁹の⁵⁰⁰第⁵⁰¹款⁵⁰²の⁵⁰³第⁵⁰⁴款⁵⁰⁵の⁵⁰⁶第⁵⁰⁷款⁵⁰⁸の⁵⁰⁹第⁵¹⁰款⁵¹¹の⁵¹²第⁵¹³款⁵¹⁴の⁵¹⁵第⁵¹⁶款⁵¹⁷の⁵¹⁸第⁵¹⁹款⁵²⁰の⁵²¹第⁵²²款⁵²³の⁵²⁴第⁵²⁵款⁵²⁶の⁵²⁷第⁵²⁸款⁵²⁹の⁵³⁰第⁵³¹款⁵³²の⁵³³第⁵³⁴款⁵³⁵の⁵³⁶第⁵³⁷款⁵³⁸の⁵³⁹第⁵⁴⁰款⁵⁴¹の⁵⁴²第⁵⁴³款⁵⁴⁴の⁵⁴⁵第⁵⁴⁶款⁵⁴⁷の⁵⁴⁸第⁵⁴⁹款⁵⁵⁰の⁵⁵¹第⁵⁵²款⁵⁵³の⁵⁵⁴第⁵⁵⁵款⁵⁵⁶の⁵⁵⁷第⁵⁵⁸款⁵⁵⁹の⁵⁶⁰第⁵⁶¹款⁵⁶²の⁵⁶³第⁵⁶⁴款⁵⁶⁵の⁵⁶⁶第⁵⁶⁷款⁵⁶⁸の⁵⁶⁹第⁵⁷⁰款⁵⁷¹の⁵⁷²第⁵⁷³款⁵⁷⁴の⁵⁷⁵第⁵⁷⁶款⁵⁷⁷の⁵⁷⁸第⁵⁷⁹款⁵⁸⁰の⁵⁸¹第⁵⁸²款⁵⁸³の⁵⁸⁴第⁵⁸⁵款⁵⁸⁶の⁵⁸⁷第⁵⁸⁸款⁵⁸⁹の⁵⁹⁰第⁵⁹¹款⁵⁹²の⁵⁹³第⁵⁹⁴款⁵⁹⁵の⁵⁹⁶第⁵⁹⁷款⁵⁹⁸の⁵⁹⁹第⁶⁰⁰款⁶⁰¹の⁶⁰²第⁶⁰³款⁶⁰⁴の⁶⁰⁵第⁶⁰⁶款⁶⁰⁷の⁶⁰⁸第⁶⁰⁹款⁶¹⁰の⁶¹¹第⁶¹²款⁶¹³の⁶¹⁴第⁶¹⁵款⁶¹⁶の⁶¹⁷第⁶¹⁸款⁶¹⁹の⁶²⁰第⁶²¹款⁶²²の⁶²³第⁶²⁴款⁶²⁵の⁶²⁶第⁶²⁷款⁶²⁸の⁶²⁹第⁶³⁰款⁶³¹の⁶³²第⁶³³款⁶³⁴の⁶³⁵第⁶³⁶款⁶³⁷の⁶³⁸第⁶³⁹款⁶⁴⁰の⁶⁴¹第⁶⁴²款⁶⁴³の⁶⁴⁴第⁶⁴⁵款⁶⁴⁶の⁶⁴⁷第⁶⁴⁸款⁶⁴⁹の⁶⁵⁰第⁶⁵¹款⁶⁵²の⁶⁵³第⁶⁵⁴款⁶⁵⁵の⁶⁵⁶第⁶⁵⁷款⁶⁵⁸の⁶⁵⁹第⁶⁶⁰款⁶⁶¹の⁶⁶²第⁶⁶³款⁶⁶⁴の⁶⁶⁵第⁶⁶⁶款⁶⁶⁷の⁶⁶⁸第⁶⁶⁹款⁶⁷⁰の⁶⁷¹第⁶⁷²款⁶⁷³の⁶⁷⁴第⁶⁷⁵款⁶⁷⁶の⁶⁷⁷第⁶⁷⁸款⁶⁷⁹の⁶⁸⁰第⁶⁸¹款⁶⁸²の⁶⁸³第⁶⁸⁴款⁶⁸⁵の⁶⁸⁶第⁶⁸⁷款⁶⁸⁸の⁶⁸⁹第⁶⁹⁰款⁶⁹¹の⁶⁹²第⁶⁹³款⁶⁹⁴の⁶⁹⁵第⁶⁹⁶款⁶⁹⁷の⁶⁹⁸第⁶⁹⁹款⁷⁰⁰の⁷⁰¹第⁷⁰²款⁷⁰³の⁷⁰⁴第⁷⁰⁵款⁷⁰⁶の⁷⁰⁷第⁷⁰⁸款⁷⁰⁹の⁷¹⁰第⁷¹¹款⁷¹²の⁷¹³第⁷¹⁴款⁷¹⁵の⁷¹⁶第⁷¹⁷款⁷¹⁸の⁷¹⁹第⁷²⁰款⁷²¹の⁷²²第⁷²³款⁷²⁴の⁷²⁵第⁷²⁶款⁷²⁷の⁷²⁸第⁷²⁹款⁷³⁰の⁷³¹第⁷³²款⁷³³の⁷³⁴第⁷³⁵款⁷³⁶の⁷³⁷第⁷³⁸款⁷³⁹の⁷⁴⁰第⁷⁴¹款⁷⁴²の⁷⁴³第⁷⁴⁴款⁷⁴⁵の⁷⁴⁶第⁷⁴⁷款⁷⁴⁸の⁷⁴⁹第⁷⁵⁰款⁷⁵¹の⁷⁵²第⁷⁵³款⁷⁵⁴の⁷⁵⁵第⁷⁵⁶款⁷⁵⁷の⁷⁵⁸第⁷⁵⁹款⁷⁶⁰の⁷⁶¹第⁷⁶²款⁷⁶³の⁷⁶⁴第⁷⁶⁵款⁷⁶⁶の⁷⁶⁷第⁷⁶⁸款⁷⁶⁹の⁷⁷⁰第⁷⁷¹款⁷⁷²の⁷⁷³第⁷⁷⁴款⁷⁷⁵の⁷⁷⁶第⁷⁷⁷款⁷⁷⁸の⁷⁷⁹第⁷⁸⁰款⁷⁸¹の⁷⁸²第⁷⁸³款⁷⁸⁴の⁷⁸⁵第⁷⁸⁶款⁷⁸⁷の⁷⁸⁸第⁷⁸⁹款⁷⁹⁰の⁷⁹¹第⁷⁹²款⁷⁹³の⁷⁹⁴第⁷⁹⁵款⁷⁹⁶の⁷⁹⁷第⁷⁹⁸款⁷⁹⁹の⁸⁰⁰第⁸⁰¹款⁸⁰²の⁸⁰³第⁸⁰⁴款⁸⁰⁵の⁸⁰⁶第⁸⁰⁷款⁸⁰⁸の⁸⁰⁹第⁸¹⁰款⁸¹¹の⁸¹²第⁸¹³款⁸¹⁴の⁸¹⁵第⁸¹⁶款⁸¹⁷の⁸¹⁸第⁸¹⁹款⁸²⁰の⁸²¹第⁸²²款⁸²³の⁸²⁴第⁸²⁵款⁸²⁶の⁸²⁷第⁸²⁸款⁸²⁹の⁸³⁰第⁸³¹款⁸³²の⁸³³第⁸³⁴款⁸³⁵の⁸³⁶第⁸³⁷款⁸³⁸の⁸³⁹第⁸⁴⁰款⁸⁴¹の⁸⁴²第⁸⁴³款⁸⁴⁴の⁸⁴⁵第⁸⁴⁶款⁸⁴⁷の⁸⁴⁸第⁸⁴⁹款⁸⁵⁰の⁸⁵¹第⁸⁵²款⁸⁵³の⁸⁵⁴第⁸⁵⁵款⁸⁵⁶の⁸⁵⁷第⁸⁵⁸款⁸⁵⁹の⁸⁶⁰第⁸⁶¹款⁸⁶²の⁸⁶³第⁸⁶⁴款⁸⁶⁵の⁸⁶⁶第⁸⁶⁷款⁸⁶⁸の⁸⁶⁹第⁸⁷⁰款⁸⁷¹の⁸⁷²第⁸⁷³款⁸⁷⁴の⁸⁷⁵第⁸⁷⁶款⁸⁷⁷の⁸⁷⁸第⁸⁷⁹款⁸⁸⁰の⁸⁸¹第⁸⁸²款⁸⁸³の⁸⁸⁴第⁸⁸⁵款⁸⁸⁶の⁸⁸⁷第⁸⁸⁸款⁸⁸⁹の⁸⁹⁰第⁸⁹¹款⁸⁹²の⁸⁹³第⁸⁹⁴款⁸⁹⁵の⁸⁹⁶第⁸⁹⁷款⁸⁹⁸の⁸⁹⁹第⁹⁰⁰款⁹⁰¹の⁹⁰²第⁹⁰³款⁹⁰⁴の⁹⁰⁵第⁹⁰⁶款⁹⁰⁷の⁹⁰⁸第⁹⁰⁹款⁹¹⁰の⁹¹¹第⁹¹²款⁹¹³の⁹¹⁴第⁹¹⁵款⁹¹⁶の⁹¹⁷第⁹¹⁸款⁹¹⁹の⁹²⁰第⁹²¹款⁹²²の⁹²³第⁹²⁴款⁹²⁵の⁹²⁶第⁹²⁷款⁹²⁸の⁹²⁹第⁹³⁰款⁹³¹の⁹³²第⁹³³款⁹³⁴の⁹³⁵第⁹³⁶款⁹³⁷の⁹³⁸第⁹³⁹款⁹⁴⁰の⁹⁴¹第⁹⁴²款⁹⁴³の⁹⁴⁴第⁹⁴⁵款⁹⁴⁶の⁹⁴⁷第⁹⁴⁸款⁹⁴⁹の⁹⁵⁰第⁹⁵¹款⁹⁵²の⁹⁵³第⁹⁵⁴款⁹⁵⁵の⁹⁵⁶第⁹⁵⁷款⁹⁵⁸の⁹⁵⁹第⁹⁶⁰款⁹⁶¹の⁹⁶²第⁹⁶³款⁹⁶⁴の⁹⁶⁵第⁹⁶⁶款⁹⁶⁷の⁹⁶⁸第⁹⁶⁹款⁹⁷⁰の⁹⁷¹第⁹⁷²款⁹⁷³の⁹⁷⁴第⁹⁷⁵款⁹⁷⁶の⁹⁷⁷第⁹⁷⁸款⁹⁷⁹の⁹⁸⁰第⁹⁸¹款⁹⁸²の⁹⁸³第⁹⁸⁴款⁹⁸⁵の⁹⁸⁶第⁹⁸⁷款⁹⁸⁸の⁹⁸⁹第⁹⁹⁰款⁹⁹¹の⁹⁹²第⁹⁹³款⁹⁹⁴の⁹⁹⁵第⁹⁹⁶款⁹⁹⁷の⁹⁹⁸第⁹⁹⁹款¹⁰⁰⁰の¹⁰⁰¹第¹⁰⁰²款¹⁰⁰³の¹⁰⁰⁴第¹⁰⁰⁵款¹⁰⁰⁶の¹⁰⁰⁷第¹⁰⁰⁸款¹⁰⁰⁹の¹⁰¹⁰第¹⁰¹¹款¹⁰¹²の¹⁰¹³第¹⁰¹⁴款¹⁰¹⁵の¹⁰¹⁶第¹⁰¹⁷款¹⁰¹⁸の¹⁰¹⁹第¹⁰²⁰款¹⁰²¹の¹⁰²²第¹⁰²³款¹⁰²⁴の¹⁰²⁵第¹⁰²⁶款¹⁰²⁷の¹⁰²⁸第¹⁰²⁹款¹⁰³⁰の¹⁰³¹第¹⁰³²款¹⁰³³の¹⁰³⁴第¹⁰³⁵款¹⁰³⁶の¹⁰³⁷第¹⁰³⁸款¹⁰³⁹の¹⁰⁴⁰第¹⁰⁴¹款¹⁰⁴²の¹⁰⁴³第¹⁰⁴⁴款¹⁰⁴⁵の¹⁰⁴⁶第¹⁰⁴⁷款¹⁰⁴⁸の¹⁰⁴⁹第¹⁰⁵⁰款¹⁰⁵¹の¹⁰⁵²第¹⁰⁵³款¹⁰⁵⁴の¹⁰⁵⁵第¹⁰⁵⁶款¹⁰⁵⁷の¹⁰⁵⁸第¹⁰⁵⁹款¹⁰⁶⁰の¹⁰⁶¹第¹⁰⁶²款¹⁰⁶³の¹⁰⁶⁴第¹⁰⁶⁵款¹⁰⁶⁶の¹⁰⁶⁷第¹⁰⁶⁸款¹⁰⁶⁹の¹⁰⁷⁰第¹⁰⁷¹款¹⁰⁷²の¹⁰⁷³第¹⁰⁷⁴款¹⁰⁷⁵の¹⁰⁷⁶第¹⁰⁷⁷款¹⁰⁷⁸の¹⁰⁷⁹第¹⁰⁸⁰款¹⁰⁸¹の¹⁰⁸²第¹⁰⁸³款¹⁰⁸⁴の¹⁰⁸⁵第¹⁰⁸⁶款¹⁰⁸⁷の¹⁰⁸⁸第¹⁰⁸⁹款¹⁰⁹⁰の¹⁰⁹¹第¹⁰⁹²款¹⁰⁹³の¹⁰⁹⁴第¹⁰⁹⁵款¹⁰⁹⁶の¹⁰⁹⁷第¹⁰⁹⁸款¹⁰⁹⁹の¹¹⁰⁰第¹¹⁰¹款¹¹⁰²の¹¹⁰³第¹¹⁰⁴款¹¹⁰⁵の¹¹⁰⁶第¹¹⁰⁷款¹¹⁰⁸の¹¹⁰⁹第¹¹¹⁰款¹¹¹¹の¹¹¹²第¹¹¹³款¹¹¹⁴の¹¹¹⁵第¹¹¹⁶款¹¹¹⁷の¹¹¹⁸第¹¹¹⁹款¹¹²⁰の¹¹²¹第¹¹²²款¹¹²³の¹¹²⁴第¹¹²⁵款¹¹²⁶の¹¹²⁷第¹¹²⁸款¹¹²⁹の¹¹³⁰第¹¹³¹款¹¹³²の¹¹³³第¹¹³⁴款¹¹³⁵の¹¹³⁶第¹¹³⁷款¹¹³⁸の¹¹³⁹第¹¹⁴⁰款¹¹⁴¹の¹¹⁴²第¹¹⁴³款¹¹⁴⁴の¹¹⁴⁵第¹¹⁴⁶款¹¹⁴⁷の¹¹⁴⁸第¹¹⁴⁹款¹¹⁵⁰の¹¹⁵¹第¹¹⁵²款¹¹⁵³の¹¹⁵⁴第¹¹⁵⁵款¹¹⁵⁶の¹¹⁵⁷第¹¹⁵⁸款¹¹⁵⁹の¹¹⁶⁰第¹¹⁶¹款¹¹⁶²の¹¹⁶³第¹¹⁶⁴款¹¹⁶⁵の¹¹⁶⁶第¹¹⁶⁷款¹¹⁶⁸の¹¹⁶⁹第¹¹⁷⁰款¹¹⁷¹の¹

und einsetzen, wan daz unserm egnanten herren odir sinen erben fugeit und eben kunnet oder in und sinen erben dez dunket, daz ez in odir irre herscheite nutze si.”

(12) J. KOLB, a. a. O. (注²⁰), S. 56 f.

(13) J. KOLB, a. a. O. (注²⁰), S. 70 ff. 旧市と新市（拡張部）は今後、単一の裁判所、シュルトハイス、都市参事会のもとに服し、新市の住民と旧市の住民と同様の諸権利を享受するものとされた。R. SCHRODER – C. KÖHNE, a. a. O. (注²⁰), S. 478 ff., Art. 5; M. SCHAAB – R. LENZ, a. a. O. (注²⁰), Nr. 88, Art. 5, „Und sol auch furbaz mee in der alten stat und in der nuwen stat ein gericht und ein schultheiß und ein rat sin und sollet die in der nuwen stat alle die recht, gnade und frineit glich haben als die haben, die in der alten stat gewesen sint, ane all geverde.“

(14) 前述の文獻の題’ H. EHMER, a. a. O. (注²⁰), S. 315 f.

(15) J. KOLB, a. a. O. (注²⁰), S. 75 ff.; H. EHMER, a. a. O. (注²⁰), S. 300 ff. 544 ff. Ruprechtsbau の建設などが行われた。城の増築が十六世紀以降一層大規模に続けられたこと。〆

(16) J. KOLB, a. a. O. (注²⁰), S. 173 f.

(17) J. KOLB, a. a. O. (注²⁰), S. 207; H. EHMER, a. a. O. (注²⁰), S. 306.

(18) Werner RÖSENER, Die wirtschaftlichen Ressourcen der Fürstenhöfe: Die schwindende Bedeutung der Einnahmen aus den Kammergütern, in: Gerhard Fouquet u. a. (Hg.), Hofwirtschaft. Ein ökonomischer Blick auf Hof und Residenz in Spätmittelalter und früher Neuzeit, (Residenzenforschung, Bd. 21), Ostfildern 2008, S. 305-328, S. 313 ff.; Gabriel ZEILINGER, Herrenspeise und Hofversorgung – Der Heidelberger Hof um 1500 als Haushaltsbetrieb, in: Ebenda, S. 475-485, 505 の註 1 図 1 及び図 2 について、同論文集所収の諸論文の題’ Werner PARAVICINI (Hg.), Höfe und Residenzen im spätmittelalterlichen Reich. Bilder und Begriffe, Teilbd. 1: Begriffe, (Residenzenforschung, Bd. 15, II), Ostfildern 2005, S. 33-115, を参照。

(19) W. RÖSENER, a. a. O. (注²⁰), S. 316 f.

(20) J. KOLB, a. a. O. (注²⁰), S. 107 ff.

(21) G. ZEILINGER, a. a. O. (注²⁰), S. 477 ff. なお、一五〇八／〇九年にハイデルベルクの調理所書記 Küchenschreiber によって作成・提出された会計報告によれば、宮廷食材関係の出費は当時のプファルツ中央財政で使用可能な金額の九分の一を

を述べた。Ebenda, S. 481 ff.

- (22) 概観として、Meinrad SCHAAB, *Geschichte der Kurpfalz*, Bd. 1: Mittelalter, Stuttgart 1988, S. 208 ff. ハイデルベルク宮廷における展開された学芸活動の諸分野について、Jan – Dirk Müller (Hg.), *Wissen für den Hof. Der spätmittelalterliche Verschriftungsprozeß am Beispiel Heidelberg im 15. Jahrhundert*, (Münstersche Mittelalter-Schriften, Bd. 67), Münster 1994. 中世後期のプファルツ宮廷における学芸活動や宮中伯の学芸政策について、Martina Backes, *Das literarische Leben am kurpfälzischen Hof zu Heidelberg im 15. Jahrhundert. Ein Beitrag zur Gönnerforschung des Spätmittelalters*, (Hermæa. Germanistische Forschungen, NF Bd. 68), Tübingen 1992. 参考文献：「中世以来の中央集権の大権について」Karl HARTFELDER, *Konrad Celtes und der Heidelberger Humanistenkreis*, in: HZ 47 (1882), S. 14-36; DERS., *Zur Gelehrtengeschichte Heidelbergs am Ende des Mittelalters*, in: ZGO 45 (1891), S. 141-171; Jakob WILLE, *Der Humanismus in der Pfalz*, in: ZGO 62 (1908), S. 9-40. 上巻の人文主義について、その一般的意義、Gerhard RITTER, *Die geschichtliche Bedeutung des deutschen Humanismus*, in: HZ 127 (1923), S. 393-453. ハイデルベルク大学と人文主義の関係について、Paul Oskar KRISTELLER, *Scholastik und Humanismus an der Universität Heidelberg*, in: Gundolf KEIL u. a. (Hg.), *Der Humanismus und die oberen Fakultäten*, Weinheim 1987, S. 1-20. 人文主義とロンバルド・マルティネスと宮中伯ヘーリンと知人のハイデルベルクの人文主義との関係について、前記のハルトフェルターの論文以外に、Lewis W. SPITZ, *Conrad Celtes. The German Arch – Humanist*, Cambridge (Mass), 1957, S. 45-54; Tibor KLANTICZAY, *Celts und die sodalitas litteraria per Germaniam*, in: August BUCK und Martin BIRCHER (Hg.), *RESPUBLICA GUELPHERYTANA. Wolfenbüttele Beiträge zur Renaissance- und Barockforschung*, Festschrift für Paul RAABE, Amsterdam 1987, S. 79-105, S. 86 f. 参考文献：その他、本文に取り上げない他の「ハイデルベルクと活動した人文主義者について」Wilhelm WATTENBACH, *Samuel Karoch von Lichtenberg, ein Heidelberger Humanist*, in: ZGO 28 (1876), S. 38-50; DERS., *Werner von Themar, ein Heidelberger Humanist*, in: ZGO 33 (1880), S. 1-101.
- (23) 彼の死（一四七六年）と墓について、贈与と受領など。Gerhard KATTERMANN, *Ein Büchervermächtis des Kurfürsten Friedrich I. von der Pfalz*, in: ZGO 89 (1937), S. 44-57.
- (24) Jan – Dirk Müller, *Der siegreiche Fürst im Entwurf der Gelehrten. Zu den Anfängen eines höfischen Humanismus in*

- (28) F. E. BARON, a. a. O. (注25), S. 94 ff.
- (29) Veit PROBST, Petrus Antonius de Clapis (ca. 1440-1512). Ein italienischer Humanist im Dienste Friedrich des Siegreichen von der Pfalz, (Veröffentlichungen des Historischen Instituts der Universität Mannheim, Bd. 10), Paderborn u. a. 1989, S. 6 ff. ベートルスについて「また」Gerhard RITTER, Petrus Antonius Finariensis, der Nachfolger Peter Luders in Heidelberg. Ein Beitrag zur Geschichte des Frühhumanismus am Oberrhein, in: Archiv für Kulturgeschichte 26 (1936), S. 89-103; Guido KISCH, Petrus Antonius Finariensis' Lobrede auf Basel, in: Ders., Gestalten und Probleme aus Humanismus und Jurisprudenz. Neue Studien und Texte, Berlin 1969, S. 241-279. ※参照。
- (30) V. PROBST, a. a. O. (注29), S. 19. 上の君主鑑の史料編纂について「V. PROBST, a. a. O. (注29), S. 152 ff. またベートルスは、ハイドルベルクの宮廷に移った後、宮中伯の委託を受けて、ブルゴーニュ公シャルルおよびクレーフエ公ヨハンに献呈された君主鑑をも執筆した。史料編纂は、それぞれ「V. PROBST, a. a. O. (注29), S. 177 ff., 213 ff. ベートルスの君主鑑については、Bruno SINGER, Die Fürstenspiegel in Deutschland im Zeitalter des Humanismus und der Reformation. Bibliographische Grundlagen und ausgewählte Interpretationen. Jakob Wimpfeling, Wolfgang Seidel, Johann Sturm, Urban Rieger, (Humanistische Bibliothek, Reihe I: Abhandlungen, Bd. 34), München 1981, S. 67 ff. ※参照。また中世後期の君主鑑の事例として「Sven RABELER, Fürstenspiegel in: W. PARAVICINI (Hg.), Hof und Schrift. (注29), S. 329-346.
- (31) V. PROBST, a. a. O. (注29), S. 20 ff. ベートルスがプファルツ宮廷の関係者などと交わした書簡の史料編纂として「V. PROBST, a. a. O. (注29), S. 109 ff.
- (32) V. PROBST, a. a. O. (注29), S. 40 ff. なお「ベートルスは、宮中伯フリードリヒ一世の死後、なお宮中伯フィリップのもとでしばらく仕えた後、一四八四年以後はマインツ大司教バルトルト・フォン・ヘンネベルク Berthold von Henneberg のためにも働き、教皇インノケンティウス八世から教皇特使に任命されるなど、当時の帝国・教会政治で重要な役割を果たした。」V. PROBST, a. a. O. (注29), S. 83 ff., 90 ff.
- (33) L. W. SPITZ, a. a. O. (注29), S. 45-54; T. KLANICZAY, a. a. O. (注29), S. 86 ff.
- (34) これらの君主鑑について「B. SINGER, a. a. O. (注30), S. 75 ff., 173 ff. そのうち「ルートヴィヒ五世に捧げられた Agatharchia の史料編纂として」Ebdenda, S. 229-249. ヴァイムプフェリングについては「他に「Joseph KNEPPER, Jakob

Wimpfeling (1450-1528). Sein Leben und und seine Werke, (Erläuterungen und Ergänzungen zu Janssens Geschichte des deutschen Volkes. Bd. 3, H. 2-4). Freiburg 1902; Paul ADAM, L'humanisme a Selestat. L'école, les humanistes, la bibliothèque, Selestat 1962, S. 37-50; Dieter MERTENS, Jakob Wimpfeling (1450-1528), Pädagogischer Humanismus, in: P. G. SCHMIDT (Hg.), a. a. O. (註5), S. 35-57; Markus MÜLLER, Fürstenspiegel und Bischofsspiegel: der Beitrag Jakob Wimpfeling's, in: Sven LEMBKE und DERS. (Hg.), Humanisten am Oberrhein. Neue Gelehrte im Dienst alter Herren, (Schriften zur süddeutschen Landeskunde, 37), Leinfelden – Echterdingen 2004, S. 9-147 参照。

- (5) Stefan RHEIN, Johannes Reuchlin (1455-1522). Ein deutscher >>uomo universale<<, in: P. G. SCHMIDT (Hg.), a. a. O. (註5), S. 59-75, S. 66. ローマン・マンフレッド・キース (Hg.), Johannes Reuchlin 1455-1522. Festgabe seiner Vaterstadt Pforzheim zur 500. Wiederkehr seines Geburtstages, Pforzheim 1955; Markus Rafael ACKERMANN, Der Jurist Johannes Reuchlin (1455-1522), (Schriften zur Rechtsgeschichte, H. 77), Berlin 1999.

- (6) ローマン・マンフレッド・キースの人文主義への関心について, Frank E. BARON, a. a. O. (註5), S. 12 ff. <マキリアニズムと教育法の博士学位を 취득>, 後ロマン・マンフレッド・キースの人文主義への関心について, Maximilian BUCHNER, Die Stellung des kurpfälzischen Kanzlers und Speierer Bischofs Mathias Rammung († 1478) zum geistigen Leben seiner Zeit, in: Neue Heidelberger Jahrbücher 16 (1910), S. 81-94, S. 88 ff. 参照。 註4, DERS., Ein Jugendgedicht Jakob Wimpfeling's auf Bischof Mathias Rammung von Speier. Beitrag zur Geschichte des Humanismus in Heidelberg, in: ZGO 61 (1907), S. 478-485 参照。

- (7) マティアス・マン・ケイナールの歴史叙述の機能に關して, Birgit STUDDT, Fürstenhof und Geschichte. Legitimation durch Überlieferung, (Norm und Struktur. Bd. 2). Köln u. a. 1992. 註4, DIES., Überlieferung und Interesse. Späte Handschriften der Chronik des Matthias von Kemnat und die Geschichtsforschung der Neuzeit, in: Kurt ANDERMANN (Hg.), Historiographie am Oberrhein im späten Mittelalter und in der frühen Neuzeit, (Oberheimische Studien, Bd. 7), Sigmaringen 1988, S. 275-308 参照。 宮田 幸夫の関心で成立した歴史叙述一般に關して, DIES., Hofgeschichtsschreibung, in: W. PARAVICINI (Hg.), Hof und Schrift (註5), S. 373-390.

- (8) B. STUDDT, Fürstenhof (註5), S. 372-421. マティアス・マン・ケイナールの年代記のテキスト, Konrad HOFMANN (Hg.),

Matthias von Kemnat, Chronik Friedrichs I, in: Quellen zur Geschichte Friedrichs I des Siegreichen Kurfürsten von der Pfalz. Bd. 1, S. 1-141, Bd. 2, S. 304-315. (Quellen und Erörterungen zur bayerischen und deutschen Geschichte. Bd. 2, 3), München 1862-63 (ND Aalen 1969).

- (39) プファルム宮廷になつた音楽家職について、Gerhard Fretzsch, Quellen und Forschungen zur Geschichte der Musik am kurpfälzischen Hof zu Heidelberg bis 1622. (Akademie der Wissenschaft und der Literatur. Abhandlungen der geistes- und sozialwissenschaftlichen Klasse, Jg. 1963, Nr. 6), Heidelberg 1963, S. 583-763. 特にマーブムルマー世の河
中伯の教養なみの音楽へのなつたについて、Ebenda, S. 618 ff.

- (40) 川の結婚などについて、Maximilian Buchner, Die Amberger Hochzeit (1474). Ein Beitrag zur politischen und kulturellen Geschichte des ausgehenden Mittelalters, in: ZGO 64 (1910), S. 584-604, 65 (1911), S. 95-127. 各々の川の結婚の前、ヘーリン
プとブルゴーニャ公シャルルの娘ペリアとの婚姻が全つたについて、フリードリッヒ一世のあと、プファルムが帝国
政治のみならず、ヨーロッパ政治上の主要なクターの一角を占めたことを示す。M. Buchner, ZGO 64, S. 590 ff.

- (41) 川の宮廷命令について、Ellen Widder, Der Amberger Hof 1474. Entstehung und Funktion der ältesten kurpfälzischen
Hofordnung, in: Dies. u. a., (Hg.), Manipulus fororum. Aus Mittelalter. Landesgeschichte, Literatur und Historiographie.
Festschrift für Peter JOHANEK zum 60. Geburtstag, Münster u. a. 2000, S. 271-305. 各々の史料に基づき、Ebenda, S. 296-305.
中世後期・近世ドイツの宮廷命令について、論文集 Holger Kruse und Werner PARAVICINI (Hg.), Höfe und Hofordnungen
1200-1600. (Residenzenforschung, Bd. 10), Sigmaringen 1999 の中で、Ellen Widder, Hofordnungen, in: W. PARAVICINI (Hg.),
Hof und Schrift (法文), S. 391-407 (S. 396-405) など、十四世紀の宮廷命令の歴史を、マンハインで、Dietmar
WILLOWIT, Hofordnungen als Zeugnisse des Rechtsdenkens, in: Reinhardt Butz u. a. (Hg.), Hof und Theorie.
Annäherungen an ein historisches Phänomen. (Norm und Struktur. Studien zum sozialen Wandel in Mittelalter und
früher Neuzeit, Bd. 22), Köln u. a. 2004, S. 165-178. 多くの領邦におつて、他の分野の立法と同様、宮廷命令立法の盛期は一
十六世紀であった。Ebenda, S. 165 ff. 個別領邦の宮廷命令について、例として、Klaus FUNK (Bearb.), Die klevischen
Hofordnungen. (Rechtsgeschichtliche Schriften, Bd. 9), Köln u. a. 1997.

- (42) ハーデルベルク大教区について、M. SCHAB, Geschichte (法文), S. 120 ff., 186 f.; Gerhard RITTER, Die Heidelberger

Universität. Ein Stück deutscher Geschichte, Bd. 1: Das Mittelalter (1386-1508), Heidelberg 1936; Hermann WEISERT, Die Verfassung der Universität Heidelberg. Überblick 1386-1952, (Abhandlungen der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Philosophisch – historische Klasse, Jg. 1974, 2. Abhandlung), Heidelberg 1974; Eike WOLGAST, Die kurpfälzische Universität 1386-1803, in: Wilhelm DOERR (Hg.), Semper apertus. Sechshundert Jahre Ruprecht – Karls – Universität Heidelberg 1386-1986, Bd. 1. Mittelalter und frühe Neuzeit 1386-1803, Berlin u. a. 1985, S. 1-70; E. WOLGAST, Die Universität Heidelberg 1386-1986, Berlin u. a. 1986; Peter MORAW, Heidelberg. Universität, Hof und Stadt im ausgehenden Mittelalter, in: Bernd MÖLLER u. a. (Hg.), Studien zum städtischen Bildungswesen des späten Mittelalters und der frühen Neuzeit, (Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen. Philologisch-historische Klasse, 3. Folge, 137), Göttingen 1983, S. 524-552, (Ders., Gesammelte Beiträge zur deutschen und europäischen Universitätsgeschichte. Strukturen – Personen – Entwicklungen, (Education and Society in the Middle Ages and Renaissance, 31), Leiden u. a. 2008, S. 295-329 ミッドル・エイジズ・ソサエティ; Dietmar WILLOWIT, Das juristische Studium in Heidelberg und die Lizentiaten der Juristenfakultät von 1386 bis 1436, in: W. DOERR, a. a. O., S. 85-135; Erno BÜNZ, Die Universität zwischen Residenzstadt und Hof im späten Mittelalter. Wechselwirkung und Distanz, Integration und Konkurrenz, in: J. HIRSCHBEGEL u. a. (Hg.), Städtisches Bürgertum (注1), S. 229-253, S. 249 ff. 中世後期の神聖ローマ帝国における大学に関する日本の研究として、島田雄次郎『ヨーロッパ大学史研究』(一九六七年 未来社)七一九四頁、別府昭郎『ドイツにおける大学教授の誕生』(一九九八年 創文社)三三八二頁、浅野啓子「中世後期ボヘミアの教会改革運動とプラハ大学」浅野啓子・佐久間弘展編著『教育の社会史 ヨーロッパ中・近世』(二〇〇六年 知泉書館)三二一六頁、浅野啓子「一四 – 一五世紀チェコにおけるフス派大学教師と王権」森原隆編『ヨーロッパ・エリート支配と政治文化』(二〇一〇年 成文堂)二六〇 – 二七九頁。

- (43) 設立に至る状況と経過に つづいて H. WEISERT, a. a. O. (注42), S. 19 ff.; E. WOLGAST, Die kurpfälzische Universität (注47), S. 1 ff.

- (44) Eduard WINKELMANN (Hg.), Urkundenbuch der Universität Heidelberg, Bd. 1: Urkunden, Heidelberg 1886, Nr. 2; M. SCHAB – R. LENZ, a. a. O. (注43), Nr. 79.

- (56) E. WOLGAST, Die kurpfälzische Universität (注42), S. 12 f.; P. MORAW, Heidelberg (注24), S. 543.
- (57) ハイデルベルク市民の中から、中・上層階層出身者を中心に、多くの学生がハイデルベルク大学で学んだことについては、P. MORAW, Heidelberg (注42), S. 541 ff. を参照。
- (58) ハイデルベルク大学では、創設時のマルシリウス・フォン・インゲン以来まず名目論（いわゆる *via moderna*）が教えられていたが、その後一四四〇年代から実在論（いわゆる *via antiqua*）を奉じる教師が登場し、両派の間で激しい対立が起きていた。この対立は一四五二年のフリードリヒ一世の大学改革について、H. WEISERT, a. a. O. (注42), S. 46 ff.; E. WOLGAST, Die kurpfälzische Universität (注42), S. 13 ff.; E. WINKELMANN, a. a. O. (注44), Nr. 109. その後の宮中伯たちによる大学への介入について、H. WEISERT, a. a. O. (注42), S. 48 ff.
- (59) P. MORAW, Heidelberg (注24), S. 530f.; D. WILLOWITZ, Studium (注24), S. 124.
- (60) ハイデルベルク大学と人文主義との関係について、E. WOLGAST, Die kurpfälzische Universität (注24), S. 17. ヴーター・ルーダーと大学との関係について、R. KETTEMANN, a. a. O. (注25), S. 25 ff.
- (61) 中世後期ドイツの諸領邦におけるマントウ制と地方行政の発達について、一般的には、Dietmar WILLOWITZ, Die Entwicklung und Verwaltung der spätmittelalterlichen Landesherrschaft, in: Kurt G. A. JESERICH u. a. (Hrsg.), Deutsche Verwaltungsgeschichte, Bd. I: Vom Spätmittelalter bis zum Ende der Reiches, Stuttgart 1983, S. 66-143, 266-271, S. 92-104; E. SCHUBERT, a. a. O. (注一), S. 14 ff. 領邦間の比較・ロンボタニー研究として重要なのが、Christian Hesse, Amtsträger der Fürsten im spätmittelalterlichen Reich. Die Funktionsseiten der lokalen Verwaltung in Bayern - Landshut, Hessen, Sachsen und Württemberg 1350-1515, (Schrittemreihe der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Bd. 70), Göttingen 2003. 近世への展開については、Wilhelm JANSSEN, Neue Wege und Formen territorialer Verwaltung am Niederrhein im Übergang zur frühen Neuzeit, in: Rhyjoll 58 (1994), S. 133-148. 西南ドイツを対象とした、地方末端における支配関係と近世的支配の形成を扱ったモノグラフとして、Thomas SIMON, Grundherrschaft und Vogtei. Eine Strukturanalyse spätmittelalterlicher und frühneuzeitlicher Herrschaftsbildung, (Ius Commune, Sonderhefte 77), Frankfurt a. M. 1995.
- (62) 一四世紀末から十六世紀前半のプファルツ支配の拡大については、Meinrad SCHAAB, Die Festigung der pfälzischen Territorialmacht

im 14. Jahrhundert, in: Hans PATZE (Hg.), *Der deutsche Territorialstaat im 14. Jahrhundert*, Bd. 2, (Vorträge und Forschungen, Bd. 14), Sigmaringen 1971, S. 171-197, S. 177 ff.; DERS., *Geschichte* (註3), S. 80 ff., 104 ff.; DERS., *Kurfürz*, in: DERS. und Hansmartin SCHWARZMAIER (Hg.), *Handbuch der Baden-Württembergischen Geschichte*, Bd. 2: *Die Territorien im alten Reich*, Stuttgart 1995, S. 247-333, S. 256 ff. 参考文献。

(93) A. SCHÄFER, *Bretten* (註3), S. 84.

(94) RPR, 1. Nr. 3070, 3098, 3175; M. SCHAAB, *Festigung* (註3), S. 177, 185.

(95) RPR, 1. Nr. 3916, 3928. *Ladenburg* について、ローレンツ宮中伯が、ローレンツ伯爵が半分の支配権を持っていたこと。

RPR, 1. Nr. 4620.

(96) M. SCHAAB, *Festigung* (註3), S. 177.

(97) 上の分野について、中世後期ローレンツの領邦一般について、E. SCHUBERT, a. a. O. (註一), S. 61 ff.

(98) 宮中伯の地方行政の発展について、Henry J. COHN, *The Government of the Rhine Palatinate in the Fifteenth Century*, Oxford 1965, S. 235 ff.; M. SCHAAB, *Festigung* (註3), S. 191 ff.; DERS., *Geschichte* (註3), S. 118 f., 189 ff., 207. 西ローマのローマ・オーバーamtについて、Daniel HABERLE, *Das Reichsland bei Kaiserslautern*, Kaiserslautern 1907; Wilhelm FABRICIUS, *Das Pfälzische Oberamt Simmern*, in: *Westdeutsche Zeitschrift für Geschichte und Kunst* 28 (1909), S. 70-131; Eugen SCHMIDTBORN, *Zur Geschichte des kurpfälzischen Oberamts Bacharach*, (Diss. phil. Marburg), Marburg 1913; Theodor KARST, *Neustadt als linksrheinisches Zentrum pfälzgräflich-kurpfälzischer Herrschaft und Verwaltung*, in: K.-P. WESTRICH, *Neustadt* (註3), S. 139-170; A. SCHÄFER, *Bretten* (註3), S. 135 ff.; Sigrid SCHMITT, *Territorialstaat und Gemeinde im kurpfälzischen Oberamt Alzey*, Vom 14. bis zum Anfang des 17. Jahrhunderts, (Geschichtliche Landeskunde, Bd. 38), Stuttgart 1992 (ドイツ歴史や中世について、ローレンツ・タルブーレン・オーバーamt Gernersheim について、Joseph PROBST, *Geschichte der Stadt und Festung Gernersheim*, Speyer 1898, S. 265 ff. 西ローマのローレンツの地方行政について、西ローマ研究について、Rüdiger LENZ, *Kellerei und Unteramt Disberg*, *Entwicklung einer regionalen Verwaltungsinstanz im Rahmen der kurpfälzischen Territorialpolitik am unteren Neckar*, (Veröffentlichungen der Kommission für geschichtliche Landeskunde in Baden – Württemberg, Reihe B: Forschungen, Bd. 115), Stuttgart 1989

が、やちり主に近世の状態を中心に検討しよう。

- (69) M. SCHAAB, Entstehung (注7), S. 255, 263 f.; Siegfried Hofmann, Urkundenwesen, Kanzlei und Regierungssystem der Herzöge von Bayern und Pfalzgrafen bei Rhein von 1180 bzw. 1214 bis 1255 bzw. 1294, (Münchener Historische Studien, Abteilung Geschichtliche Hilfswissenschaften, Bd. 3), Kallmünz 1967, S. 32 f.
- (70) S. Hofmann, a. a. O. (注69), S. 31.
- (71) S. Hofmann, a. a. O. (注69), S. 31 f.
- (72) S. Hofmann, a. a. O. (注69), S. 103 f.
- (73) Alfons Sprinkart, Kanzlei, Rat und Urkundenwesen der Pfalzgrafen bei Rhein und Herzöge von Bayern 1294 bis 1314 (1317), Forschungen zum Regierungssystem Rudolfs I. und Ludwigs IV., (Forschungen zur Kaiser- und Papstgeschichte des Mittelalters, Beiheft zu J. F. Böhrer, Regesta Imperii, Bd. 4), Köln/Wien 1986, S. 222 ff.
- (74) A. Sprinkart, a. a. O. (注73), S. 235 ff.
- (75) A. Sprinkart, a. a. O. (注73), S. 243 ff.
- (76) Joachim Spiegel, Urkundenwesen, Kanzlei, Rat und Regierungssystem des Pfalzgrafen bei Rhein und Herzogs von Bayern Ruprecht I. (1309-1390), 2 Teile, Neustadt an der Weinstraße 1996, T. 1, S. 350 ff.
- (77) J. Spiegel, a. a. O. (注76), T. 1, S. 353 ff.
- (78) J. Spiegel, a. a. O. (注76), T. 1, S. 367 ff.
- (79) J. Spiegel, a. a. O. (注76), T. 1, S. 366 f.
- (80) J. Spiegel, a. a. O. (注76), T. 1, S. 389 ff.
- (81) J. Spiegel, a. a. O. (注76), T. 1, S. 474 ff. ゲルマースハイムのフォークトゥングについて J. Probst, Germersheim (注8), S. 302 f. ツィッキンゲン Sickingen, コルシマホルン Hirschhorn, リンデンフェルス Lindenfels, ナイベルグ Neipergg, ヤーメン Gemmingen などの下級貴族家門出身者がフォークトになつてくる。
- (82) J. Spiegel, a. a. O. (注76), T. 1, S. 393 ff.; M. Schaab, Festigung (注69), S. 192. 一五世紀中葉以降, ゲルマースハイム地方書記 Landschreiber が史料に現れる。 J. Probst, Germersheim (注8), S. 308.

- (83) J. KOLB, a. a. O. (注2), S. 187 f.; M. SCHAAB, Festigung, S. 192.
- (84) J. KOLB, a. a. O. (注2), S. 136 ff. ただし、残っている史料は上ブファルツ関係のものが比較的多い。
- (85) J. KOLB, a. a. O. (注2), S. 142 f., 147. ヴィットストウーム、フォークトなどと税関書記 Zoltschreiber などのこのような違いは、前者が現地で多くの出費を自らなす必要があったのに対して、後者にはその必要性が小さかったことによるのである。
- (86) ライン宮中伯の城塞政策の概観として、M. SCHAAB, Geschichte (注2), S. 109 f.
- (87) J. SPIEGEL, a. a. O. (注76), T. 1, S. 413 ff.
- (88) M. SCHAAB, Geschichte (注2), S. 114.
- (89) J. SPIEGEL, a. a. O. (注76), T. 1, S. 436 ff.
- (90) M. SCHAAB, Geschichte (注2), S. 187 ff.; DERS., Kurpfalz (注2), S. 276 ff.
- (91) エド・ M. SCHAAB, Geschichte (注2), S. 192, 207; H. J. COHN, a. a. O. (注89), S. 235 ff.; S. SCHMITT, Territorialstaat (注89), S. 9.
- (92) 具体的に例えば、オーバーアムト・アルツァイにおける地方書記職の発展について、S. SCHMITT, Territorialstaat (注89), S. 13. なお、そこで農民に課されたさまざまな負担については、Ebenda, S. 139 ff.
- (93) このような政策の結果成立した村落裁判所の一六世紀における状態については、S. SCHMITT, Territorialstaat (注89), S. 117 ff.
- (94) 例えば、アルツァイ近くのオストホーフェン Osthofen において、ブファルツが体僕支配 Leiherrschaft を手掛かりに裁判支配の半分を有したマインツ大司教の影響力を空洞化していったことについて、S. SCHMITT, Territorialstaat (注89), S. 94 ff.
- (95) S. SCHMITT, Territorialstaat (注89), S. 114.
- (96) オーバーアムト・アルツァイにおける領邦支配下の土地領主支配について、S. SCHMITT, Territorialstaat (注89), S. 161 ff.
- (97) やはりオーバーアムト・アルツァイにおける具体例（農村ゲマインデの組織、経済活動、社会構造）として、S. SCHMITT, Territorialstaat (注89), S. 228 ff.

- (86) シハハニ裁判所をもちての基礎となつたシハハニといふは、そのもとより、Gerhard THEUERKAUF, Art. Zent, in: HRG, 1. Aufl., Berlin 1998, Sp. 1663 f.; DERS., Art. Zentgericht, in: HRG, 1. Aufl., Berlin 1998, Sp. 1664 f. を参照。
- (87) Fritz ZIMMERMANN, Die Weistümer und der Ausbau der Landeshoheit in der Kurpfalz, (Historische Studien, H. 311), Berlin 1937, S. 23 ff. Odenwald の Affolterbach, Waldmichelbach, Bergstraße の Landberg, Sachsenheim, Neckar 流域の Reichartshausen, Neckargmünd の各 Zent についで法裁判がなされ、公證人によつて記録された。Carl BRECKMANN (Bearb.), Reichartshausen und Meckesheimer Zent, (Badische Weistümer und Dorfordnungen, 1. Abt. Präzise Weistümer und Dorfordnungen, H. 1), Heidelberg 1917, Nr. 3 (Reichartshausen); Karl KOLLING (Bearb.), Die Weistümer der Zent Schriesheim, (Badische Weistümer und Dorfordnungen, Bd. 2), (Veröffentlichungen der Kommission für Geschichtliche Landeskunde in Baden – Württemberg, Reihe A: Quellen, Bd. 16), Stuttgart 1968, S. 10 ff., Art. 1., „Wir bekennen, sprechen und wysen hutzutage ja unserm gnedigen hern, herzog Ludwigen, obersten vogt und hern des landgerichtes, und das er uff und in derselben zent zu gebieten und zu verbieten und auch buß, hoe und nider, zu machen hat.“ (Sachsenheim), S. 293 (Neckargmünd).
- (100) F. ZIMMERMANN, a. a. O. (注86), S. 41 ff., 65 ff., 70 ff., 77 ff. 例を以て、Pfälzrömischenの間で争はれた Schriesheim の Zentallmend の支配権は、一四四九年の法裁判で Pfälzrömischen側にあることが宣言された。K. KOLLING, a. a. O. (注86), S. 36 ff., Art. 2., „Da wysen wir, das unser genediger herr, der pfalzgrave, oberster faut und herr sy, die alman zu beschirmen und schuern dem land und armen luten, die recht darin han.“ 54 ff. トヤン宮中伯の文書として、トヤン平野の Zent をもちての管轄区域にわたる法裁判の史料は本として、上記の如く、Karl KOLLING (Bearb.), Die Weistümer der Zent Kirchheim, (Badische ..., Bd. 3), (Veröffentlichungen ..., Bd. 29), Stuttgart 1979; DERS., (Bearb.), Die Weistümer der Zenten Eberbach und Mosbach, (Badische ..., Bd. 4), (Veröffentlichungen ..., Bd. 38), Stuttgart 1985. 法裁判 Weistümer の歴史および概念規定について、そのもとより、S. SCHMITT, Territorialstaat (注88), S. 26 ff.; Werner ROSENER, Einführung in die Agrargeschichte, Darmstadt 1997, S. 48–55 をもちて、そのもとより、挙げられた文献を参照。
- (101) 中世後期にイン領邦における都市の意義について、一般的には、E. SCHUBERT, a. a. O. (注一), S. 73 ff. 日本語文献として、千葉徳夫「中世後期」(注一)。

- (20) 宮中伯の領土集積の過程 M. SCHAB, Geschichte (註2), S. 110 ff.; Sigrid SCHMITT, Landesherr, Stadt und Bürgertum in der Kurpfalz des späten Mittelalters und der frühen Neuzeit, in: Jürgen TREPPESEN und Kurt ANDERMANN (Hg.), Landesherrliche Städte in Südwestdeutschland, (Oberrheinische Studien, Bd. 12), Sigmaringen 1994, S. 45-66. 領土集積の過程 Ebenda, S. 47 ff. 領土集積の過程の分析 Christian REINHARDT, Fürstliche Autorität versus städtische Autonomie. Die Pfalzgrafen bei Rhein und ihre Städte 1449 bis 1618. Amberg, Mosbach, Nabburg und Neustadt an der Haardt, (Veröffentlichungen der Kommission für geschichtliche Landeskunde in Baden – Württemberg, Reihe B: Forschungen, Bd. 186), Stuttgart 2012. 宮中伯の領土集積の過程の分析 Ludwig PETRY, Alzey in der wittelsbachischen Politik, in: Friedrich Karl Becker (Hg.), 1750 Jahre Alzey. Festschrift, Alzey 1973, S. 127-140. Klaus – Peter SCHRÖDER, Alzey. Verfassungsgeschichtliche Entwicklung einer kurpfälzischen Stadt, in: Friedrich Karl Becker (Hg.), 700 Jahre Stadt Alzey. Festschrift, Alzey 1977, S. 58-100. 宮中伯の領土集積の過程 Pirmin SPIESS, Verfassungsentwicklung der Stadt Neustadt an der Weinstraße von den Anfängen bis zur französischen Revolution, (Veröffentlichungen zur Geschichte von Stadt und Kreis Neustadt an der Weinstraße, Schriftenreihe der Bezirksgruppe Neustadt im Historischen Verein der Pfalz 6), Speyer 1970; Klaus – Peter WESTRICH (Bearb.), Neustadt an der Weinstraße. Beiträge zur Geschichte einer pfälzischen Stadt. Neustadt an der Weinstraße 1975; Adalbert ERLER (Hg.), Der Oberhof zu Neustadt an der Weinstraße, (Frankfurter wissenschaftliche Beiträge, Rechts- und wirtschaftswissenschaftliche Reihe, Bd. 23, 24), 2 Bde., Frankfurt a. M. 1968, 1971; Ch. REINHARDT, a. a. O., S. 42-68. 宮中伯の領土集積の過程 Karl NIEDERHOFER, Die Stadtordeung für Kaiserslautern zu Beginn des 15. Jahrhunderts. Ein Beitrag zum Recht der kurpfälzischen Territorialstädte, in: MHVP 74 (1976), S. 29-38. 宮中伯の領土集積の過程 J. PROBST, Germersheim, (註8), 宮中伯の領土集積の過程 Ch. REINHARDT, a. a. O., S. 68-91. 宮中伯の領土集積の過程 John Gustav WEISS, Geschichte der Stadt Weinheim an der Bergstraße, Weinheim 1911; Fritz TRAUTZ, Die mittlere Stadt der deutschen Geschichte unter besonderer Berücksichtigung von Weinheim, in: Weinheimer Geschichtsblatt 23 (1955), S. 3-18. 宮中伯の領土集積の過程 Hans Martin SCHWARZMEIER, Geschichte der Stadt Eberbach am Neckar bis zur Einführung der Reformation 1556, (Geschichte der Stadt Eberbach am Neckar, Bd. 1), Sigmaringen 1986, S. 79-180. 宮中伯の領土集積の過程 Alfons SCHÄFER,

Geschichte der Stadt Bretten von den Anfängen bis zur Zerstörung im Jahre 1689, (Oberheinische Studien, Bd. 4), Karlsruhe 1978. 256 S., 95-195. DERS. (Bearb.), Urkunden, Rechtsquellen und Chroniken zur Geschichte der Stadt Bretten, Bretten 1967.

- (39) RPR, I, Nr. 943; Pirmin Spess, Das Privileg König Rudolfs von Habsburg vom 6. April 1275, in: Klaus - Peter WESTRICH, Neustadt (註29), S. 91-106. 神聖ローマン皇帝の聖詔と初期都市の発展. 44頁. Hermann SCHREIBMÜLLER, Die ältesten Besitzer und der Name der Stadt Neustadt an der Haardt, in: Ebenda, S. 63-71; Karl Richard WEINTZ, Zur Entstehung von Neustadt an der Weinstraße, in: Ebenda, S. 73-76; Klaus - Peter SCHRODER, Überlegungen zur Gründung von Neustadt an der Weinstraße, in: Ebenda, S. 77-89. 参照.

- (40) RPR, I, Nr. 1011; Ludwig BAUR (Hg.) Hessische Urkunden, Bd. 2, ND Aalen 1979, Nr. 307; M. SCHAAB - R. LENZ, a. a. O. (註39), Nr. 31; Georg Friedrich BOHN, Die Alzeier Stadtrechtsverleihung von 1277 in territorialgeschichtlicher Sicht, in: Friedrich Karl BECKER (Hg.), 1750 Jahre Alzey (註29), S. 141-151; Albrecht ECKHARDT, König Rudolfs Stadtrechtsverleihung für Alzey vom 24. Oktober 1277. Mit einer vergleichenden Untersuchung der Freiungsprivilegien für Zwingenberg, Landau, Neustadt a. d. W., Braubach, Dieburg und Camberg (1274-1281) sowie andere Orte des mittelhessischen Raumes, in: Friedrich Karl BECKER (Hg.), 700 Jahre Stadt Alzey (註29), S. 32-57.

- (41) RPR, I, Nr. 2952, 2953. 2952. 2953. 2954. 2955. 2956. 2957. 2958. 2959. 2960. 2961. 2962. 2963. 2964. 2965. 2966. 2967. 2968. 2969. 2970. 2971. 2972. 2973. 2974. 2975. 2976. 2977. 2978. 2979. 2980. 2981. 2982. 2983. 2984. 2985. 2986. 2987. 2988. 2989. 2990. 2991. 2992. 2993. 2994. 2995. 2996. 2997. 2998. 2999. 3000. 3001. 3002. 3003. 3004. 3005. 3006. 3007. 3008. 3009. 3010. 3011. 3012. 3013. 3014. 3015. 3016. 3017. 3018. 3019. 3020. 3021. 3022. 3023. 3024. 3025. 3026. 3027. 3028. 3029. 3030. 3031. 3032. 3033. 3034. 3035. 3036. 3037. 3038. 3039. 3040. 3041. 3042. 3043. 3044. 3045. 3046. 3047. 3048. 3049. 3050. 3051. 3052. 3053. 3054. 3055. 3056. 3057. 3058. 3059. 3060. 3061. 3062. 3063. 3064. 3065. 3066. 3067. 3068. 3069. 3070. 3071. 3072. 3073. 3074. 3075. 3076. 3077. 3078. 3079. 3080. 3081. 3082. 3083. 3084. 3085. 3086. 3087. 3088. 3089. 3090. 3091. 3092. 3093. 3094. 3095. 3096. 3097. 3098. 3099. 3100. 3101. 3102. 3103. 3104. 3105. 3106. 3107. 3108. 3109. 3110. 3111. 3112. 3113. 3114. 3115. 3116. 3117. 3118. 3119. 3120. 3121. 3122. 3123. 3124. 3125. 3126. 3127. 3128. 3129. 3130. 3131. 3132. 3133. 3134. 3135. 3136. 3137. 3138. 3139. 3140. 3141. 3142. 3143. 3144. 3145. 3146. 3147. 3148. 3149. 3150. 3151. 3152. 3153. 3154. 3155. 3156. 3157. 3158. 3159. 3160. 3161. 3162. 3163. 3164. 3165. 3166. 3167. 3168. 3169. 3170. 3171. 3172. 3173. 3174. 3175. 3176. 3177. 3178. 3179. 3180. 3181. 3182. 3183. 3184. 3185. 3186. 3187. 3188. 3189. 3190. 3191. 3192. 3193. 3194. 3195. 3196. 3197. 3198. 3199. 3200. 3201. 3202. 3203. 3204. 3205. 3206. 3207. 3208. 3209. 3210. 3211. 3212. 3213. 3214. 3215. 3216. 3217. 3218. 3219. 3220. 3221. 3222. 3223. 3224. 3225. 3226. 3227. 3228. 3229. 3230. 3231. 3232. 3233. 3234. 3235. 3236. 3237. 3238. 3239. 3240. 3241. 3242. 3243. 3244. 3245. 3246. 3247. 3248. 3249. 3250. 3251. 3252. 3253. 3254. 3255. 3256. 3257. 3258. 3259. 3260. 3261. 3262. 3263. 3264. 3265. 3266. 3267. 3268. 3269. 3270. 3271. 3272. 3273. 3274. 3275. 3276. 3277. 3278. 3279. 3280. 3281. 3282. 3283. 3284. 3285. 3286. 3287. 3288. 3289. 3290. 3291. 3292. 3293. 3294. 3295. 3296. 3297. 3298. 3299. 3300. 3301. 3302. 3303. 3304. 3305. 3306. 3307. 3308. 3309. 3310. 3311. 3312. 3313. 3314. 3315. 3316. 3317. 3318. 3319. 3320. 3321. 3322. 3323. 3324. 3325. 3326. 3327. 3328. 3329. 3330. 3331. 3332. 3333. 3334. 3335. 3336. 3337. 3338. 3339. 3340. 3341. 3342. 3343. 3344. 3345. 3346. 3347. 3348. 3349. 3350. 3351. 3352. 3353. 3354. 3355. 3356. 3357. 3358. 3359. 3360. 3361. 3362. 3363. 3364. 3365. 3366. 3367. 3368. 3369. 3370. 3371. 3372. 3373. 3374. 3375. 3376. 3377. 3378. 3379. 3380. 3381. 3382. 3383. 3384. 3385. 3386. 3387. 3388. 3389. 3390. 3391. 3392. 3393. 3394. 3395. 3396. 3397. 3398. 3399. 3400. 3401. 3402. 3403. 3404. 3405. 3406. 3407. 3408. 3409. 3410. 3411. 3412. 3413. 3414. 3415. 3416. 3417. 3418. 3419. 3420. 3421. 3422. 3423. 3424. 3425. 3426. 3427. 3428. 3429. 3430. 3431. 3432. 3433. 3434. 3435. 3436. 3437. 3438. 3439. 3440. 3441. 3442. 3443. 3444. 3445. 3446. 3447. 3448. 3449. 3450. 3451. 3452. 3453. 3454. 3455. 3456. 3457. 3458. 3459. 3460. 3461. 3462. 3463. 3464. 3465. 3466. 3467. 3468. 3469. 3470. 3471. 3472. 3473. 3474. 3475. 3476. 3477. 3478. 3479. 3480. 3481. 3482. 3483. 3484. 3485. 3486. 3487. 3488. 3489. 3490. 3491. 3492. 3493. 3494. 3495. 3496. 3497. 3498. 3499. 3500. 3501. 3502. 3503. 3504. 3505. 3506. 3507. 3508. 3509. 3510. 3511. 3512. 3513. 3514. 3515. 3516. 3517. 3518. 3519. 3520. 3521. 3522. 3523. 3524. 3525. 3526. 3527. 3528. 3529. 3530. 3531. 3532. 3533. 3534. 3535. 3536. 3537. 3538. 3539. 3540. 3541. 3542. 3543. 3544. 3545. 3546. 3547. 3548. 3549. 3550. 3551. 3552. 3553. 3554. 3555. 3556. 3557. 3558. 3559. 3560. 3561. 3562. 3563. 3564. 3565. 3566. 3567. 3568. 3569. 3570. 3571. 3572. 3573. 3574. 3575. 3576. 3577. 3578. 3579. 3580. 3581. 3582. 3583. 3584. 3585. 3586. 3587. 3588. 3589. 3590. 3591. 3592. 3593. 3594. 3595. 3596. 3597. 3598. 3599. 3600. 3601. 3602. 3603. 3604. 3605. 3606. 3607. 3608. 3609. 3610. 3611. 3612. 3613. 3614. 3615. 3616. 3617. 3618. 3619. 3620. 3621. 3622. 3623. 3624. 3625. 3626. 3627. 3628. 3629. 3630. 3631. 3632. 3633. 3634. 3635. 3636. 3637. 3638. 3639. 3640. 3641. 3642. 3643. 3644. 3645. 3646. 3647. 3648. 3649. 3650. 3651. 3652. 3653. 3654. 3655. 3656. 3657. 3658. 3659. 3660. 3661. 3662. 3663. 3664. 3665. 3666. 3667. 3668. 3669. 3670. 3671. 3672. 3673. 3674. 3675. 3676. 3677. 3678. 3679. 3680. 3681. 3682. 3683. 3684. 3685. 3686. 3687. 3688. 3689. 3690. 3691. 3692. 3693. 3694. 3695. 3696. 3697. 3698. 3699. 3700. 3701. 3702. 3703. 3704. 3705. 3706. 3707. 3708. 3709. 3710. 3711. 3712. 3713. 3714. 3715. 3716. 3717. 3718. 3719. 3720. 3721. 3722. 3723. 3724. 3725. 3726. 3727. 3728. 3729. 3730. 3731. 3732. 3733. 3734. 3735. 3736. 3737. 3738. 3739. 3740. 3741. 3742. 3743. 3744. 3745. 3746. 3747. 3748. 3749. 3750. 3751. 3752. 3753. 3754. 3755. 3756. 3757. 3758. 3759. 3760. 3761. 3762. 3763. 3764. 3765. 3766. 3767. 3768. 3769. 3770. 3771. 3772. 3773. 3774. 3775. 3776. 3777. 3778. 3779. 3780. 3781. 3782. 3783. 3784. 3785. 3786. 3787. 3788. 3789. 3790. 3791. 3792. 3793. 3794. 3795. 3796. 3797. 3798. 3799. 3800. 3801. 3802. 3803. 3804. 3805. 3806. 3807. 3808. 3809. 3810. 3811. 3812. 3813. 3814. 3815. 3816. 3817. 3818. 3819. 3820. 3821. 3822. 3823. 3824. 3825. 3826. 3827. 3828. 3829. 3830. 3831. 3832. 3833. 3834. 3835. 3836. 3837. 3838. 3839. 3840. 3841. 3842. 3843. 3844. 3845. 3846. 3847. 3848. 3849. 3850. 3851. 3852. 3853. 3854. 3855. 3856. 3857. 3858. 3859. 3860. 3861. 3862. 3863. 3864. 3865. 3866. 3867. 3868. 3869. 3870. 3871. 3872. 3873. 3874. 3875. 3876. 3877. 3878. 3879. 3880. 3881. 3882. 3883. 3884. 3885. 3886. 3887. 3888. 3889. 3890. 3891. 3892. 3893. 3894. 3895. 3896. 3897. 3898. 3899. 3900. 3901. 3902. 3903. 3904. 3905. 3906. 3907. 3908. 3909. 3910. 3911. 3912. 3913. 3914. 3915. 3916. 3917. 3918. 3919. 3920. 3921. 3922. 3923. 3924. 3925. 3926. 3927. 3928. 3929. 3930. 3931. 3932. 3933. 3934. 3935. 3936. 3937. 3938. 3939. 3940. 3941. 3942. 3943. 3944. 3945. 3946. 3947. 3948. 3949. 3950. 3951. 3952. 3953. 3954. 3955. 3956. 3957. 3958. 3959. 3960. 3961. 3962. 3963. 3964. 3965. 3966. 3967. 3968. 3969. 3970. 3971. 3972. 3973. 3974. 3975. 3976. 3977. 3978. 3979. 3980. 3981. 3982. 3983. 3984. 3985. 3986. 3987. 3988. 3989. 3990. 3991. 3992. 3993. 3994. 3995. 3996. 3997. 3998. 3999. 4000. 4001. 4002. 4003. 4004. 4005. 4006. 4007. 4008. 4009. 4010. 4011. 4012. 4013. 4014. 4015. 4016. 4017. 4018. 4019. 4020. 4021. 4022. 4023. 4024. 4025. 4026. 4027. 4028. 4029. 4030. 4031. 4032. 4033. 4034. 4035. 4036. 4037. 4038. 4039. 4040. 4041. 4042. 4043. 4044. 4045. 4046. 4047. 4048. 4049. 4050. 4051. 4052. 4053. 4054. 4055. 4056. 4057. 4058. 4059. 4060. 4061. 4062. 4063. 4064. 4065. 4066. 4067. 4068. 4069. 4070. 4071. 4072. 4073. 4074. 4075. 4076. 4077. 4078. 4079. 4080. 4081. 4082. 4083. 4084. 4085. 4086. 4087. 4088. 4089. 4090. 4091. 4092. 4093. 4094. 4095. 4096. 4097. 4098. 4099. 4100. 4101. 4102. 4103. 4104. 4105. 4106. 4107. 4108. 4109. 4110. 4111. 4112. 4113. 4114. 4115. 4116. 4117. 4118. 4119. 4120. 4121. 4122. 4123. 4124. 4125. 4126. 4127. 4128. 4129. 4130. 4131. 4132. 4133. 4134. 4135. 4136. 4137. 4138. 4139. 4140. 4141. 4142. 4143. 4144. 4145. 4146. 4147. 4148. 4149. 4150. 4151. 4152. 4153. 4154. 4155. 4156. 4157. 4158. 4159. 4160. 4161. 4162. 4163. 4164. 4165. 4166. 4167. 4168. 4169. 4170. 4171. 4172. 4173. 4174. 4175. 4176. 4177. 4178. 4179. 4180. 4181. 4182. 4183. 4184. 4185. 4186. 4187. 4188. 4189. 4190. 4191. 4192. 4193. 4194. 4195. 4196. 4197. 4198. 4199. 4200. 4201. 4202. 4203. 4204. 4205. 4206. 4207. 4208. 4209. 4210. 4211. 4212. 4213. 4214. 4215. 4216. 4217. 4218. 4219. 4220. 4221. 4222. 4223. 4224. 4225. 4226. 4227. 4228. 4229. 4230. 4231. 4232. 4233. 4234. 4235. 4236. 4237. 4238. 4239. 4240. 4241. 4242. 4243. 4244. 4245. 4246. 4247. 4248. 4249. 4250. 4251. 4252. 4253. 4254. 4255. 4256. 4257. 4258. 4259. 4260. 4261. 4262. 4263. 4264. 4265. 4266. 4267. 4268. 4269. 4270. 4271. 4272. 4273. 4274. 4275. 4276. 4277. 4278. 4279. 4280. 4281. 4282. 4283. 4284. 4285. 4286. 4287. 4288. 4289. 4290. 4291. 4292. 4293. 4294. 4295. 4296. 4297. 4298. 4299. 4300. 4301. 4302. 4303. 4304. 4305. 4306. 4307. 4308. 4309. 4310. 4311. 4312. 4313. 4314. 4315. 4316. 4317. 4318. 4319. 4320. 4321. 4322. 4323. 4324. 4325. 4326. 4327. 4328. 4329. 4330. 4331. 4332. 4333. 4334. 4335. 4336. 4337. 4338. 4339. 4340. 4341. 4342. 4343. 4344. 4345. 4346. 4347. 4348. 4349. 4350. 4351. 4352. 4353. 4354. 4355. 4356. 4357. 4358. 4359. 4360. 4361. 4362. 4363. 4364. 4365. 4366. 4367. 4368. 4369. 4370. 4371. 4372. 4373. 4374. 4375. 4376. 4377. 4378. 4379. 4380. 4381. 4382. 4383. 4384. 4385. 4386. 4387. 4388. 4389. 4390. 4391. 4392. 4393. 4394. 4395. 4396. 4397. 4398. 4399. 4400. 4401. 4402. 4403. 4404. 4405. 4406. 4407. 4408. 4409. 4410. 4411. 4412. 4413. 4414. 4415. 4416. 4417. 4418. 4419. 4420. 4421. 4422. 4423. 4424. 4425. 4426. 4427. 4428. 4429. 4430. 4431. 4432. 4433. 4434. 4435. 4436. 4437. 4438. 4439. 4440. 4441. 4442. 4443. 4444. 4445. 4446. 4447. 4448. 4449. 4450. 4451. 4452. 4453. 4454. 4455. 4456. 4457. 4458. 4459. 4460. 4461. 4462. 4463. 4464. 4465. 4466. 4467. 4468. 4469. 4470. 4471. 4472. 4473. 4474. 4475. 4476. 4477. 4478. 4479. 4480. 4481. 4482. 4483. 4484. 4485. 4486. 4487. 4488. 4489. 4490. 4491. 4492. 4493. 4494. 4495. 4496. 4497. 4498. 4499. 4500. 4501. 4502. 4503. 4504. 4505. 4506. 4507. 4508. 4509. 4510. 4511. 4512. 4513. 4514. 4515. 4516. 4517. 4518. 4519. 4520. 4521. 4522. 4523. 4524. 4525. 4526. 4527. 4528. 4529. 4530. 4531. 4532. 4533. 4534. 4535. 4536. 4537. 4538. 4539. 4540. 4541. 4542. 4543. 4544. 4545. 4546. 4547. 4548. 4549. 4550. 4551. 4552. 4553. 4554. 4555. 4556. 4557. 4558. 4559. 4560. 4561. 4562. 4563. 4564. 4565. 4566. 4567. 4568. 4569. 4570. 4571. 4572. 4573. 4574. 4575. 4576. 4577. 4578. 4579. 4580. 4581. 4582. 4583. 4584. 4585. 4586. 4587. 4588. 4589. 4590. 4591. 4592. 4593. 4594. 4595. 4596. 4597. 4598. 4599. 4600. 4601. 4602. 4603. 4604. 4605. 4606. 4607. 4608. 4609. 4610. 4611. 4612. 4613. 4614. 4615. 4616. 4617. 4618. 4619. 4620. 4621. 4622. 4623. 4624. 4625. 4626. 4627. 4628. 4629. 4630. 4631. 4632. 4633. 4634. 4635. 4636. 4637. 4638. 4639. 4640. 4641. 4642. 4643. 4644. 4645. 4646. 4647. 4648. 4649. 4650. 4651. 4652. 4653. 4654. 4655. 4656. 4657. 4658. 4659. 4660. 4661. 4662. 4663. 4664. 4665. 4666. 4667. 4668. 4669. 4670. 4671. 4672. 4673. 4674. 4675. 4676. 4677. 4678. 4679. 4680. 4681. 4682. 4683. 4684. 4685. 4686. 4687. 4688. 4689. 4690. 4691. 4692. 4693. 4694. 4695. 4696. 4697. 4698. 4699. 4700. 4701. 4702. 4703. 4704. 4705. 4706. 4707. 4708. 4709. 4710. 4711. 4712. 4713. 4714. 4715. 4716. 4717. 4718. 4719. 4720. 4721. 4722. 4723. 4724. 4725. 4726. 4727. 4728. 4729. 4730. 4731. 4732. 4733. 4734. 4735. 4736. 4737. 4738. 4739. 4740. 4741. 4742. 4743. 4744. 4745. 4746. 4747. 4748. 4749. 4750. 4751. 4752. 4753. 4754. 4755. 4756. 4757. 4758. 4759. 4760. 4761. 4762. 4763. 4764. 4765. 4766. 4767. 4768. 4769. 4770. 4771. 4772. 4773. 4774. 4775. 4776. 4777. 4778. 4779. 4780. 4781. 4782. 4783. 4784. 4785. 4786. 4787. 4788. 4789. 4790. 4791. 4792. 4793. 4794. 4795. 4796. 4797. 4798. 4799. 4800. 4801. 4802. 4803. 4804. 4805. 4806. 4807. 4808. 4809. 4810. 4811. 4812. 4813. 4814. 4815. 4816. 4817. 4818. 4819. 4820. 4821. 4822. 4823. 4824. 4825. 4826. 4827. 4828. 4829. 4830. 4831. 4832. 4833. 4834. 4835. 4836. 4837. 4838. 4839. 4840. 4841. 4842. 4843. 4844. 4845. 4846. 4847. 4848. 4849. 4850. 4851. 4852. 4853. 4854. 4855. 4856. 4857. 4858. 4859. 4860. 4861. 4862. 4863. 4864. 4865. 4866. 4867. 4868. 4869. 4870. 4871. 4872. 4873. 4874. 4875. 4876. 4877. 4878. 4879. 4880. 4881. 4882. 4883. 4884. 4885. 488

トハイスとその裁判所については、K.-P. SCHRODER, a. a. O. (注10), S. 87 ff. また、アルツアイにおける市民自治に対する宮中伯支配の優位については、Ebenda, S. 83 f. ゲルマースハイムにおけるフォークトとシュルトハイスについては、J. PROBST, a. a. O. (注8), S. 302 ff., 354 f. なお、ゲルマースハイムにも城塞とそのブルクマン団体が存在した。J. PROBST, a. a. O. (注8), S. 23 ff.

(10) 宮中伯フィリップが一四九二年にプレッテンに与えた年市特権については、A. SCHÄFER, Bretten (注20), S. 129 ff.

(109) S. SCHMITT, Landesherr (注20), S. 52 ff.; Ch. REINHARDT, a. a. O. (注20), S. 413 ff.; K.-P. SCHRODER, a. a. O. (注20), S. 73. なお、一四八九年には、宮中伯フィリップによって、ヴァインハイムにも同様の特権状が与えられた。

(110) S. SCHMITT, Landesherr (注20), S. 61 f.; Ch. REINHARDT, a. a. O. (注20), S. 417 f.; Pirmin SPIESS, Die Stadtordnung Philipps des Aufrichtigen für Neustadt aus dem Jahre 1493, in: MHVP 66 (1968), S. 197-305, S. 205 ff. の騷擾の後に宮中伯フィリップが定めた都市条令のテクストは、Ebenda, S. 215-284. この条令では、シュルトハイスや都市参事会でなく、アムトメンに多くの権限が与えられ、その意味で都市のアムト体制への組み込みが進展した。S. SCHMITT, Landesherr (注20), S. 64 f. (111) S. SCHMITT, Landesherr (注10), S. 63 f. 同じように、~~もともと~~國王都市で、質入れ等を経てプファルツ支配下に入ったモスバッハとカイザースラウテルンを、宮中伯がいかにして統合していったかについては、Christian REINHARDT, Die Integration der verpfändeten Reichsstädte Mosbach und Kaiserslautern in die Pfalzgrafschaft bei Rhein im 14. und 15. Jahrhundert, in: Kaiserslauterer Jahrbuch für pfälzische Geschichte und Volkskunde 5 (2005), S. 11-84. モスバッハが比較的すみやかに宮中伯のコントロール下に置かれたのに対して、カイザースラウテルンではプファルツ支配の強化に対する抵抗がしばしば見られ、宮中伯の方も慎重に行動していた。しかしカイザースラウテルンも含めて、一五世紀後半には、宮中伯と個々の都市との関係の統一化がすすめられ、ランスフート継承戦争では両都市とも本来のプファルツ領邦都市と同様に戦備を負担することとなった。

(112) 中世後期ドイツの領邦における、教会統治と教会政策について一般的には、E. SCHUBERT, a. a. O. (注1), S. 38 ff.; D. WILLOWIT, Entwicklung (注19), S. 123, 129 f. プファルツに関しては、Richard LOSSEN, Staat und Kirche in der Pfalz im Ausgang des Mittelalters, (Vorreformationsgeschichtliche Forschungen 3), Münster 1907. 44-62. M. SCHAB, Geschichte (注23), S. 112 ff., 185 f. などの他の領邦については、例えば、Dieter STEVERMANN, Landesherrschaft und Klosterwesen im

- spätmittelalterlichen Württemberg, Sigmaringen 1989; Bernhard NEIDIGER, Das Dominikanerkloster Stuttgart, die Kanoniker vom gemeinsamen Leben in Urach und die Gründung der Universität Tübingen. Konkurrierende Reformansätze in der württembergischen Kirchenpolitik am Ausgang des Mittelalters, (Veröffentlichungen des Archivs der Stadt Stuttgart, Bd. 58), Stuttgart 1993; Manfred SCHULZE, Fürsten und Reformation, Geistliche Reformpolitik weltlicher Fürsten vor der Reformation, (Spätmittelalter und Reformation, Neue Reihe 2), Tübingen 1991. (『十五世紀後半以降のドイツ・ヨーロッパの家・Weitnerの教会統治と教会政策』#61' Ebenda, S. 13-45 におけるヨーロッパ諸国での展開を参照。)
- (11) 一三三四年#61' Gerhard SCHWERTL, Die Beziehungen der Herzöge von Bayern und Pfalzgrafen bei Rhein zur Kirche (1180-1294), (Miscellanea Bavaria Monacensia, H. 9), München 1968, S. 216 ff., 425 ff.
- (11) G. SCHWERTL, a. a. O. (註11), S. 425 ff.
- (11) R. LOSSEN, a. a. O. (註11) S. 138 ff. 中世後期の宮中伯の教会統治について#61' ロッヤンの研究に#61' M. SCHULZE, a. a. O. (註11), S. 20 ff. の註釋を参照。
- (11) RPR, I, Nr. 3997 (1372. 6. 1), Vgl. RPR, I, Nr. 4546 (1384. 7. 24); M. SCHAAF, Geschichte (註8), S. 113. 444' トナムントロハ修道院について#61' Landesdenkmalamt Baden-Württemberg (Hg.), Maulbronn. Zur 850jährigen Geschichte des Zisterzienserklusters, (Forschungen und Berichte der Bau- und Kunstdenkmalpflege in Baden-Württemberg, Bd. 7), Stuttgart 1997. 以下の#61' Peter RUCKERT, Die Bedeutung Maulbronn für die Siedlungsgeneese zwischen Stromberg und Schwarzwald im Mittelalter, in: Ebenda, S. 15-29. 44-45 Kurt ANDERMANN, Zur Besitz- und Wirtschaftsgeschichte des Klosters Maulbronn, in: Ebenda, S. 31-42 を参照。
- (11) #61' R. LOSSEN, a. a. O. (註11), S. 135 ff. 宮中伯の#61' Kollegiatstiftと修道院の創建を#61' 多くの#61' について#61'。
- (11) R. LOSSEN, a. a. O. (註11), S. 99 f.
- (11) R. LOSSEN, a. a. O. (註11), S. 101 ff.
- (12) 中世後期の修道院改革について#61' Kaspar ELM (Hg.), Reformbemühungen und Observanzbestrebungen im spätmittelalterlichen Ordenswesen, (Berliner Historische Studien, Bd. 14, Ordensstudien 6), Berlin 1989. 本論文を論文集『#61' の後の歴史を#61' について#61' Kaspar ELM, Monastische Reformen zwischen Humanismus und Reformation,

- in: Lothar PERLITT (Hg.), 900 Jahre Kloster Bursfelde. Reden und Vorträge zum Jubiläum 1993, Göttingen 1994, S. 59-111; Dieter MERTENS, Monastische Reformbewegungen des 15. Jahrhunderts: Ideen – Ziele – Resultate, in: Ivan HLAVACEK und Alexander PATSCHOVSKY (Hg.), Reform von Kirche und Reich zur Zeit der Konzilien von Konstanz (1414-1418) und Basel (1431-1449), Konstanz 1996, S. 157-181; DERS., Klosterreform als Kommunikationsereignis, in: Gerd ALTHOFF (Hg.), Formen und Funktionen öffentlicher Kommunikation im Mittelalter, (Vorträge und Forschungen, Bd. 51), Stuttgart 2001, S. 397-420. 参考: J. KEMPER, Klosterreformen (注24), S. 11-25 の研究概観を参照。
- (11) Joachim KEMPER, Klosterreformen im Bistum Worms im späten Mittelalter, (Quellen und Abhandlungen zur mittelhochdeutschen Kirchengeschichte, Bd. 115), Mainz 2006. 参考: R. LOSSEN, a. a. O. (注21), S. 153 ff.
- (12) Windesheimer Kongregation の成立と発展運動について, Wilhelm KOHL, Die Windesheimer Kongregation, in: K. Elm (Hg.), a. a. O. (注20), S. 83-106 を参照。
- (13) R. LOSSEN, a. a. O. (注20), S. 158 ff.
- (14) R. LOSSEN, a. a. O. (注20), S. 168 ff. 宮中伯が Klingennünster にあった及ぼした影響や支配についての新しいシナグラムとして, Thorsten UNGER, Klingennünster und die Kurpfalz im 15. und 16. Jahrhundert. Untersuchungen zum Aspekt „Stift und Herrschaft“ am Beispiel eines ländlichen Kollegiatstifts, (Stiftung zur Förderung der pfälzischen Geschichtsforschung, Reihe B: Abhandlungen zur Geschichte der Pfalz, Bd. 10), Neustadt an der Weinstraße 2009.
- (15) R. LOSSEN, a. a. O. (注20), S. 176 ff.
- (16) 皆川卓「ドイツ諸侯軍の近世的変容——プファルツ選帝侯の軍事権力を例に——」『歴史学研究』八二二号(二〇〇六年)六〇七-四頁、特に六四頁以下。
- (17) 中世後期ドイツにおける軍制の展開(傭兵の登場、農民・市民の召集軍、車陣などの戦術、火器の使用など)については、参考: Bernhard R. KROENER, Kriegswesen, Herrschaft und Gesellschaft 1300-1800 (Enzyklopädie Deutscher Geschichte, Bd. 92), München 2013, S. 2-20, 55-61 を参照。
- (18) 中世後期プファルツの軍制については、概観として, M. SCHAB, Geschichte (注20), S. 201 f. 専門研究として, Hans FAHRNBACHER, Das kurpfälzische Heerwesen im 15., 16. und 17. Jahrhundert, in: Mannheimer Geschichtsblätter 11 (1910), Sp. 30-

47, 51-63, 82-89, 107-115, 129-138, 146-159, 176-185 (中世以降の事情や略へ) ; Oskar Bezzel, Geschichte des Kurpfälzischen Heeres von seinen Anfängen bis zur Vereinigung von Kurpfalz und Kurbayern 1777, (Geschichte des Bayerischen Heeres, Bd. 4, T. 1), München 1925, S. 7ff.

- (21) Friedrich von Weech, Das Reibbuch anno 1504. Die Vorbereitungen der Kurpfalz zum bairischen Erbfolgekriege, in: ZGO 26 (1874), S. 137-264. 普三卓、前掲(注25)「六九頁以下」。

- (20) 「のたふに聞しつ」 中世後期々への領邦一般について、E. SCHUBERT, a. a. O. (註一), S. 88 ff.; D. WILLOWIT, Entwicklung (註2), S. 127 f.; DERS., Gesetzgebung und Recht im Übergang vom Spätmittelalter zum frühneuzeitlichen Obrigkeitsstaat, in: Okko BEHRENDTS und Christoph LINT (Hg.), Zum römischen und neuzeitlichen Gesetzesbegriff, (Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch – historische Klasse, 3. Folge, Nr. 157), Göttingen 1987, S. 123-146; Armin WOLF, Gesetzgebung in Europa 1100-1500. Zur Entstehung der Territorialstaaten, München 1996, S. 96-148; Steffen SCHLINKER, Fürstentum und Rezeption. Reichsfürstenstand und gelehrte Literatur im späten Mittelalter, (Forschungen zur deutschen Rechtsgeschichte, Bd. 18), Köln u. a. 1999, S. 238-351. 著者、Peter MORAW, Über Landesordnungen im deutschen Spätmittelalter, in: Heinz DUCHHARDT und Gert MELVILLE (Hg.), Im Spannungsfeld von Recht und Ritual. Soziale Kommunikation in Mittelalter und Früher Neuzeit, (Norm und Struktur. Studien zum sozialen Wandel in Mittelalter und früher Neuzeit, Bd. 7), Köln u. a. 1997, S. 187-201; Thomas SIMON, Krise oder Wachstum? Erklärungsversuche zum Aufkommen territorialer Gesetzgebung am Ausgang des Mittelalters, in: Gerhard KÖBLER und Hermann NEHLESEN (Hg.), Wirkungen europäischer Rechtskultur. Festschrift für Karl KROESCHELL zum 70. Geburtstag, München 1997, S. 1201-1217. 中世後期々への様々な領邦条令 Landesordnung のクロノロジーについて、P. MORAW, a. a. O., S. 190 ff. 多くの領邦が初めて領邦条令が制定されるのは、おおむね一五世紀後半以降であるが、先進的な北西部や南部では、より早かった可能性がある(特に北西部では遅くとも一五世紀前半から例がある)。個別の領邦における状況については、例として Wilhelm JANSSEN, „... na gesetze unser lande ...“. Zur territorialen Gesetzgebung im späten Mittelalter, in: Dietmar WILLOWIT (Hg.), Gesetzgebung als Faktor der Staatsentwicklung, (Der Staat, Beihft. H. 7), Berlin 1984, S. 7-40; DERS., Städtische Statuten und landesherrliche Gesetze im Erzstift Köln und im Herzogtum Kleve (1350-

1550), in: Giorgio CHITTOLINI, Dietmar WILLOWEIT (Hg.), Statuten, Städte und Territorien zwischen Mittelalter und Neuzeit in Italien und Deutschland, (Schriften des Italienisch – Deutschen Historischen Instituts in Trient, Bd. 3), Berlin 1992, S. 271-294. 日本語文献として、若曾根健治「ティロール森林令雑考―領邦立法史研究覚書―」『熊本法学』二七号(一九七八年)一―四四頁、千葉徳夫「一四四六年テューリンゲンのラント條令―領邦身分制と行政立法―」『社会経済史学』四七巻一号(一九八一年)六五―八六頁。

(131) H. J. COHN, Government (注89), S. 243 ff.; A. WOLF, a. a. O. (注130), S. 113. 一五世紀以降のプファルツにおけるポリツァー条令に「グロツ」Dorothee MUSSNUG, Kurpfalz, in: Lothar SCHILLING und Gernard SCHUCK (Hg.), Wittelsbachische Territorien (Kurpfalz, Bayern, Pfalz – Neuburg, Pfalz – Sulzbach, Jülich – Berg, Pfalz – Zweibrücken), (Repertorium der Polizeyordnungen der frühen Neuzeit, Bd. 3, 1), (Ius Commune Sonderhefte 116, 1), Frankfurt a. M. 1999, S. 1-594.

(132) D. MUSSNUG, a. a. O. (注131), S. 47, Nr. 19.

(133) D. MUSSNUG, a. a. O. (注131), S. 47f., Nr. 20; Paul HABERMehl, Helmut KNAUBER, Leben mit der Stiftskirche. Bilder und Geschehnisse 1350-2000, Neustadt an der Weinstraße 2003, S. 54 f.

(134) D. MUSSNUG, a. a. O. (注131), S. 47, Nr. 18.

(135) この条令の文脈、特に裁判における機能が意図されていたことが、D. WILLOWEIT, Gesetzgebung (注130), S. 131.